

昭和女子大学

グローバル人材育成推進事業

〔 2012年度
事業報告書 〕

グローバル人材育成推進事業 2012年度の報告に当たって

昭和女子大は2012年文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」の公募に応募し、他の41校とともに採択された。

本学は1988年以来アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンに昭和ボストンキャンパスを設置し、学生の国際理解教育の推進に取り組んできた。近年では2005年いわゆる英語GPに採択され「英語で仕事のできる人材の養成」のためプログラムの多様化、深化を進めてきた。また上海交通大学との提携も20年をむかえ、2009年にスタートした国際学科の学生は毎年現地で学んでいる。

また教育目標とする「夢をかなえる7つの力」のトップに「グローバルに通用する力」を掲げ、語学力だけでなく、世界の多様な社会、文化、価値観に敬意を払い、尊重するとともに自国の歴史・文化に対する理解と誇りを身につけるよう努めてきた。

こうした蓄積の上に2013年4月にグローバルに活躍できる女性を教育するグローバルビジネス学部を設置することとなり準備をしてきたまさにこの時期に、グローバル人材育成推進事業に採択されたのは極めて時宜を得たものとなっている。

この事業では、語学力、コミュニケーション力を身につけるだけでなく自分たちの歴史や伝統に誇りをもち、他の文化や社会に生きる人を尊重し、協同して目標を達成する力を育てることを目的に掲げている。この目的を実現するために採択決定後直ちに全学横断的なグローバル人材育成プロジェクト委員会を設置し、ボストンキャンパスを含むすべての部局が協力してこの事業を推進する体制を整えた。この委員会の下に全学的な語学教育の推進、留学生の受け入れ増大、協定校との提携の推進、多文化協働プロジェクトなどのワーキンググループを設置し、それぞれ企画、実行にあたっている。

9月24日に採択通知を受け、実質的に動き出したのは10月に入ってからだが、各学科・教務部、アドミッション部、キャリア支援部等がそれぞれ目標を定めて取り組み、それを国際交流センターがバックアップしている。2012年10月には新たにワルシャワ大学と協定を結び、上海交通大学、ソウル女子大学との間のダブルディグリーを取得する協議も整いつつある。5年間の事業終了時と比較をするため、現時点における学生たちの語学力等も把握した。

3月にはボストンキャンパスで"US-Japan Internationalizing Higher Education Symposium"を開催し、大きな成果を挙げた。またボストンとの遠隔授業システムも導入し、さらに緊密な連絡を取る体制を整備した。2013年からの留学生の受け入れプログラムも策定や、多文化協働プロジェクトの企画も進んでいる。

この事業の採択は昭和女子大学にとって大きなチャレンジであり、チャンスである。今後の取り組みを更に力強く進める上で、この2012年報告を読まれた方々からご批判、ご提言を頂ければ幸いである。

学長 坂東 眞理子

● 第Ⅰ部	本事業構想	5
● 第Ⅱ部	2012年度事業計画	17
● 第Ⅲ部	2012年度事業報告	27
● 第Ⅳ部	ボストンシンポジウム報告	45
● 第Ⅴ部	今後の実施計画	55

第 I 部

本事業構想

第 I 部 本事業構想

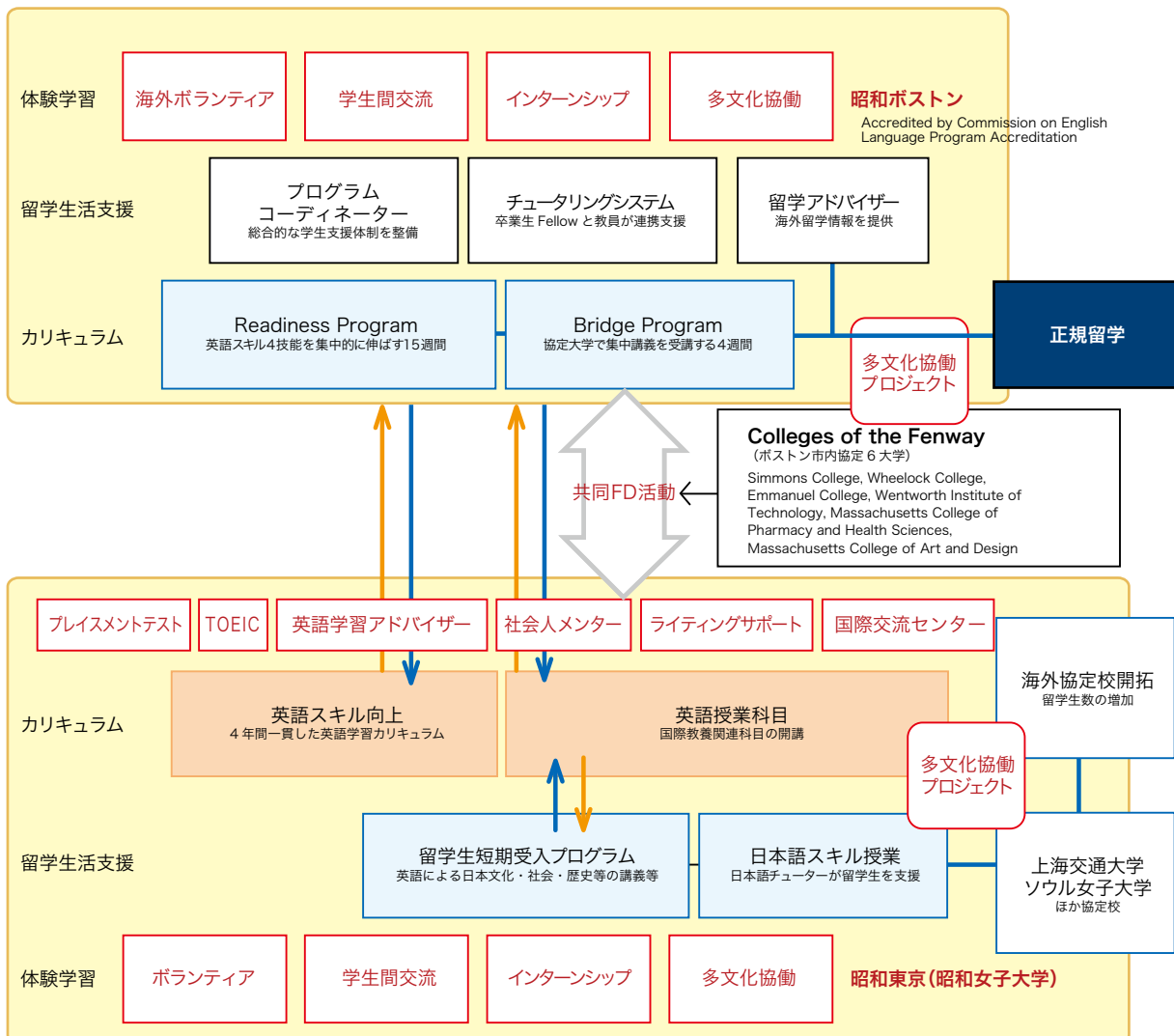
構想の概要

A 海外での取組 = 本学のボストン校や現地協定校とリンクしたグローバル・プログラムの設計

1. 海外分校「昭和ボストン」で 15 週間の実践型プログラムを開講 → 安心安全な環境でボランティアやインターンシップを体験しながら海外に目を向ける
2. 現地学生と多文化協働プロジェクトを体験 → 英語でコミュニケーションをはかる・多文化による協働体験を積む
3. 意欲ある学生には 4 週間の延長プログラム → 協定校の授業を履修・聴講する → 希望者には正規留学大学を斡旋

B 国内での取組 = 英語の授業改善とキャンパスのグローバル化

1. 英語は能力別クラスで細分化 → 英語 4 技能を向上させて海外留学に備える
2. 3・4 年次は英語による学部共通専門科目を開講 → アカデミック・ライティングなど学修に必要な英語力育成科目も並行して開講する
3. 海外協定校・受入留学生の増加 → 英語で意見交換しあうアクティブな授業の実現・多文化による協働体験を日本でも実践



①育成する人材の持つべき資質と能力、これを実現するための教育カリキュラムの内容・方法…………… 1

本構想で育成する人材＝グローバル社会の様々な分野で実務的役割を担える創造的で活力ある女性職業人の育成

3C's for 1G

身の周りの現象を地球規模の動きと関連づけて考え行動するために [Glocal] 国の内外を問わずグローバルな環境で、文化的背景の異なる他者と協働・協調し [Collaborate] 様々な異なる人材・情報・文化・物を結びつけ [Connect] 新しい価値や文化を創造 [Create] できる女性

Collaborate グローバルな環境で、文化的背景の異なる他者と協働・協調する

学生の多文化理解力と英語力を段階的に高め、希望する学生はボストンで多様な文化的背景の学生グループと協働体験を積む。
知識と実践を組み合わせることでグローバル社会を深く理解し、様々な活動で協働・協調できる人材を育成する。

Connect 様々な異なる人材・情報・文化・物を結びつける

多文化の学生がグループ毎にテーマを設定して多文化協働プロジェクトに取り組む。
違う価値観や日本人の特長を再認識しながらギャップを乗り越え、意見を交換してコミュニケーション力や協調性・柔軟性を育む。
リーダーシップやパートナーシップを体験しながら多文化混合のチームワークを発揮して、責任感やチャレンジ精神を育成する。
インターネットから情報入手、オピニオンリーダーに交渉と取材、ブログ発信等を体験して主体性と積極性を身につける。

Create 新しい価値や文化を創造する

本学では、学生が市場調査や新商品の提案をする企業協働プロジェクト研究を実践している。
このプロジェクトにグローバル企業を加え、日本滞在中の留学生とチームを編成して取り組み、課題発見・解決力を育成する。
日本のグローバル化の課題と解決策、将来性を学生自ら考え、行動する力を育成する。

Glocal 身の周りの現象を地球規模の動きと関連づけて考え行動する

グローバル社会の様々な分野で実務的役割を担える創造的で活力ある女性職業人の育成
十分な英語運用力と多文化への理解に基づいた互惠精神、ボストンや東京での協働体験を生かした主体性を備え、チームワークを引き出し、問題を乗り越えることのできる 3C's for 1G を身につけた人材を育成する。

①育成する人材の持つべき資質と能力、これを実現するための教育カリキュラムの内容・方法……………2

大学のグローバル化に向けた戦略・教育課程の国際通用性

昭和ポストンとの連携	留学体験型から グローバル人材育成型 につなげるカリキュラムを強化・発展 東京のプログラムと密接に連携したカリキュラムを設計 海外への正規留学を意識し、準備教育や情報提供を行える体制を整備
海外協定校の拡充	アジアを中心とした大学とのネットワークを強化して 海外協定校数を拡充し、交換留学生数を増加 日本語能力の低い 留学生の生活支援と教育プログラム を充実
留学準備教育、語学教育	留学を意識した科目群を配置 し、語学力向上に効果的な科目を増加 各学科の基幹科目を中心に 英語での授業科目を開講 し、専攻分野に関連する海外留学ができるよう指導
学生サポート体制の充実	留学生の 受け入れ・派遣に関する支援体制 の充実 ポストンや協定校等に留学生担当者を配置して 留学中の学生の学習・生活を現地で支援
アクティブ・ラーニングの促進	多文化協働プロジェクトにより、学部全体の アクティブ・ラーニングを促進 ポストンの多文化協働プロジェクトでは、学生寮に同居する RA を TA として採用し、正課外の学習支援を充実 現地の国際交流センター職員が必要に応じてオブザーバーやゲストを招聘する等、 学生の主体的学習をサポート
大学の国際化	ポストンの Colleges of the Fenway から専門職を招聘し、 カリキュラムの国際通用性 を高める 本構想に関する各取組の 検証・FD 活動は、本学と昭和ポストンが共同 で実施 ウェブサイトやシラバスの多言語化、外国語による情報発信、服務規程等の諸規定、事務書類、学内掲示の英語併記
事務組織の強化	大学のグローバル化の推進組織として国際交流センターを配置 学長や理事への情報提供と 大学の方針に沿った国際化の企画・立案・戦略 を実行 国際交流センターに 留学アドバイザーや語学アドバイザー等の専門職を配置 して学生支援機能を強化 昭和ポストンと Colleges of the Fenway との連携を強化して 教職員研修プログラムをポストンで運営 する。
GPA など厳格な成績評価	海外留学者のために GPA を英文証明書に掲載 成績評価は、教員個人の裁量のみ依存しないよう大学全体の基準を設定
ナンバリングの導入	人間文化学部全授業科目についてナンバリングを行い、学生の体系的な履修を支援
履修可能な上限単位数の設定	授業時間外での学修時間の増加と単位の実質化を推進 各学期で履修する単位数はより厳格に適応

①育成する人材の持つべき資質と能力、これを実現するための教育カリキュラムの内容・方法…………… 3

昭和ボストンの主なグローバル人材育成カリキュラム

英語・国際プログラム

Readiness Program

(15 週間)

英語スキル 4 技能を集中的に伸ばすコア科目群と学科の特色に応じた選択科目群で構成する。

Bridge Program

(Readiness Program に続く 4 週間)

協定大学で専門分野の集中講義を受講。
女性リーダー、福祉・教育、多言語多文化教育、ビジネス、アート、歴史等、近郊大学の正規単位の修得を目指す。

実践・体験プログラム

コミュニティサービス

ボストンでボランティア活動を体験。
小中学校や日本語学習者への日本文化紹介プログラム等の体験型プログラムでグローバル感覚を養う。
優秀な学生にはビジネス体験プログラム（インターンシップ）の参加を認める。

多文化協働プロジェクト

本学学生と Colleges of the Fenway 等の協定大学学生で協働プロジェクトを実施する。
様々な国籍を持つ学生と、共通言語である英語でグループワークを行い成果を発表する。

学生支援体制

プログラムコーディネーター

昭和ボストンにプログラムコーディネーターを置き、学生支援部と教務部との連携をはかりながら総合的な学生支援体制を整備する。

チュータリングシステム

学生の専門学修を支援するため、ボストンで学ぶ本学卒業生（Fellow）と教員とが連携するチュータリングシステムを構築する。
Fellow は、米国での大学・大学院進学を目指す学生のロールモデルとしてメンターの役割も担う。

ボストン修了後の進路

身につけた能力により次の進路を選択する。

- ①世田谷キャンパスで学修する
- ②引き続きボストンで学修する
- ③他大学に半年から 1 年間認定留学する

②、③希望者のためにボストンに留学アドバイザーを置き、近郊大学のアドミッション部門や進学コンサルタントと連携して支援する。

アメリカ国内だけでなく、中国や韓国等のアジアやヨーロッパ諸国の情報も提供する。

Readiness Program の選択科目群には仏・独・西・中・韓等の第 2 言語系科目も開講し、留学先の言語習得を目指す。

①育成する人材の持つべき資質と能力、これを実現するための教育カリキュラムの内容・方法…………… 4

昭和東京(昭和女子大学)の主なグローバル人材育成カリキュラム

英語・国際プログラム

英語スキルの向上

1年次から4年次まで一貫した英語学習カリキュラムを整備する。この英語カリキュラムを昭和ポストンの Readiness Program (コアカリキュラム) と連動させる。

英語による専門科目の開講

英語による専門科目で構成する国際教養関連科目を、人間文化学部の副専攻として開設する。昭和ポストンや海外留学から帰国した学生、海外留学生を対象として、内容は昭和ポストンの Bridge Program と同種のテーマを中心として専門性を高め、自らのキャリアを意識させる内容とする。

実践・体験プログラム

留学生短期受け入れプログラム

協定校の留学生やハーバード大学の学生を対象に、英語による日本文化・社会・歴史等の講義、歌舞伎や和食等の日本文化体験プログラム(短期)を開講する。

多文化協働プロジェクト

本学学生と留学生との多文化協働プロジェクトを実施する。ポストン・東京のいずれのプロジェクトにおいても、学生がグローバルな課題やテーマを取り上げてグループ間で協議して解決策を企業等に提案する。

留学生受け入れ体制

日本語スキル授業の開設

外国人留学生には、アカデミック・ジャパニーズを中心とした授業を開設し、日本語チューターを配置して留学生の学修サポートを行う。

海外協定校の開拓

アジアを中心とした大学へ留学できるよう、語学+授業履修ができる海外協定校を開拓する。

グローバル化の推進

現在、ポストンで行っているビジネス体験プログラム(海外インターン)を、アジア圏を含む他国でも行う。国内のインターンシップについても、グローバル企業で多文化の職場環境を持つ協力企業を開拓する。海外ボランティアでは、安全確保に注意しながら派遣国を増やす。個別学生のグローバル能力達成度を評価して適切なアドバイスを加えるグローバル人材アドバイザーを学内に配置する。

①育成する人材の持つべき資質と能力、これを実現するための教育カリキュラムの内容・方法…………… 5

卒業時の外国語力スタンダードを見据えた効果的な語学教育及び教育体制

プレイスメントテスト	入学時にプレイスメントテストを実施してレベル別クラスを編成する。少人数編成でクラス数を増やし、 より細かなレベルを設定 する。
学生の語学力向上度の測定	学期ごとに TOEIC テストを実施 し、スコアを分析して教材や授業法を検証する。 TOEIC 対策講座で学習法を指導し、 苦手意識を克服してスコアアップを目指す よう指導・助言する。
外国語による論文作成	昭和ポストンで アカデミック・ライティングの基礎講座 を開講し、文章構成等の基礎力を育成する。 昭和東京ではライティングサポートセンターが英語文章・論文の個別添削と指導を担当している。
外国語で他者と議論できる力	多文化協働プロジェクトで外国人学生との協働体験を実践する。1・2年次から 論理的思考力を高めながら 、3・4年次に英語による専門関連科目を開設し、留学生を受け入れて 多文化間で議論できる環境を整備 する。
専門科目レベルの履修が可能な力を養成する留学前準備教育	学生の英語能力を分析してカルテを作成し、 アドバイザーが学修履歴や TOEIC スコアから英語学習法を指導 する。 目標値の設定や学習方法を明確にして、海外での専門レベルの履修が可能な英語力を主体的に身につけさせる。

②目標設定の考え方とその水準の妥当性…………… 6

■これまでの実績

1. 昭和ポストンプログラム修了者（英語系学科）のうち 700 点以上のスコア取得者（例年平均）…………… 全体の約 20%

■今後の取組（目標設定の考え方）

1. 昭和ポストンの Bridge Program 開設で海外留学経験者数を増やす。
2. 東京の外国語英語科目を見直し、700 点以上のスコアを目指すクラスを設定する。
…………… 他学科・留学未経験者の底上げ
3. 昭和ポストンの Readiness Program で効果的な英語教育を実施する。
…………… 全学科のポストン留学者の TOEIC スコアが向上
4. 学部全学生のスコア平均を高める …………… 学部全体の目標スコア取得者を、8%から 16%に倍増させる。
5. 昭和ポストンの Bridge Program 開設で海外留学者数を増やす。
(平成 27 年度から卒業生を輩出)
6. 海外協定校を開拓し、平成 26 年度卒業生から留学者の実績を出す。

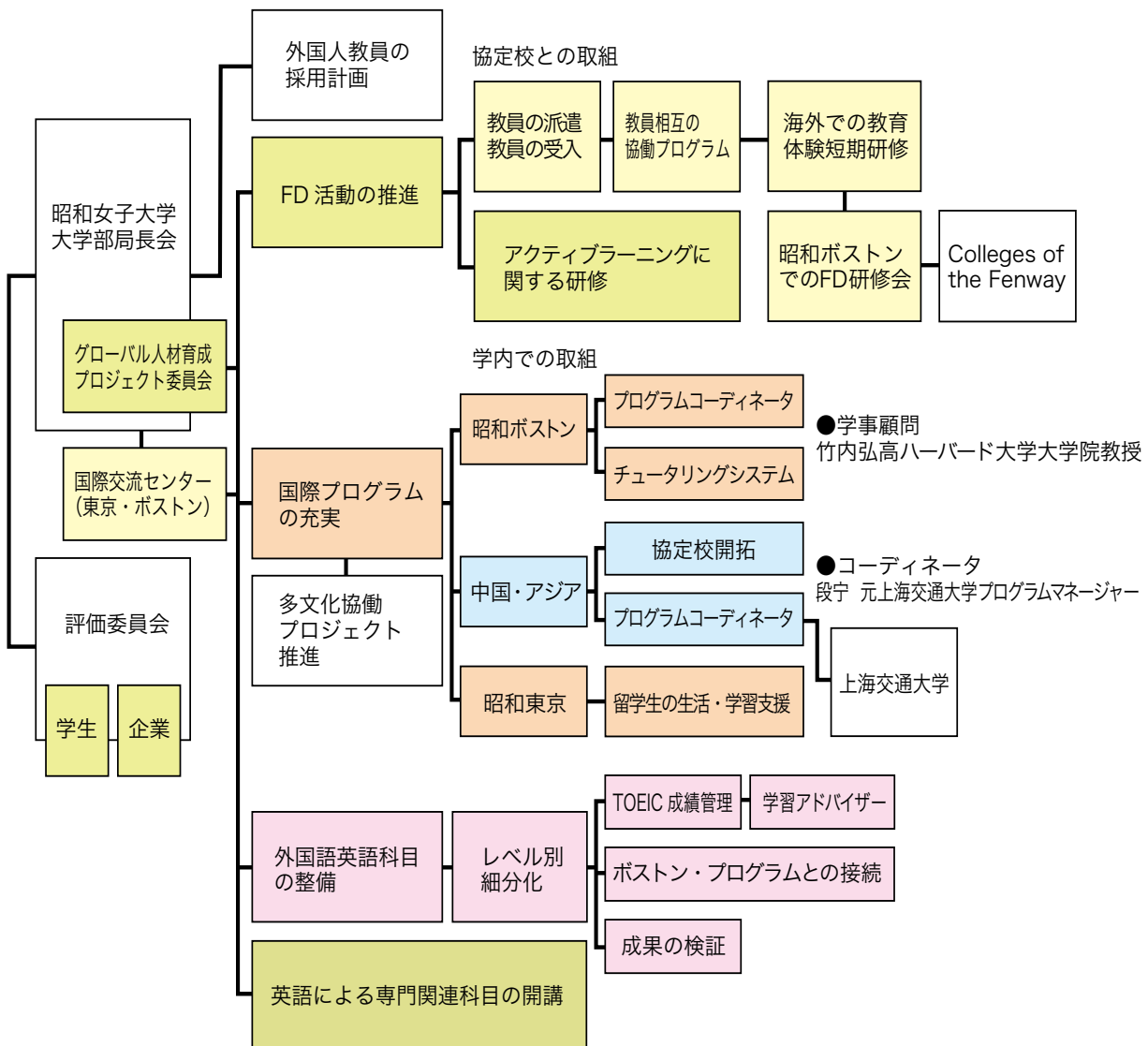
③グローバル化を推進する学内体制の整備と学内のグローバル化を推進する取組…………… 8

A 学内のグローバル化を推進する学内体制の整備＝運営管理とプロジェクトの推進

1. グローバル人材育成プロジェクト委員会を設置して本構想の運営を管理する。プロジェクトチームを編成して各事業に取り組む。
2. 外部評価委員会を設置して企業のグローバル人材ニーズをプログラムに反映させる。またプログラム履修学生にもヒアリングを行って有効性を検証する。
3. ポストンや上海でのプログラムについては、現地有識者の助言を得る。

B 学内のグローバル化を推進する取組＝FD活動と英語科目の再編成

1. 英語による授業、多文化間コミュニケーションを活性化させる授業等のグローバル教育に関するFD活動を東京とポストンで積極的に行う。
2. 海外協定校と教員間交流を行い、アジア圏の協定校からは期間限定で数名受け入れる。本学教員を協定校に派遣して教育経験を積ませる。
3. 外国語英語科目を再編成して英語による専門関連科目を新たに開講する。



③グローバル化を推進する学内体制の整備と学内のグローバル化を推進する取組…………… 9

教育のグローバル化を推進する取組

教員の国際交流と FD 活動の推進

教員の国際交流	アジア圏の協定校から教員を数名受け入れる。(1年間程度の期間限定) 本学教員を協定校に派遣し、短期集中講座を中心に海外での教育経験を積ませる。
国際協働プログラム	協定校留学生対象の短期集中プログラムでは、本学教員に加えて外国の大学から教員を短期間受け入れ、教員相互の協働プログラムを充実させる。
新規採用条件の見直し	外国人教員や国内外の大学で外国語による教育経験のある日本人教員を積極的に採用する。 応募条件では博士の学位を有すること、英語での授業ができることを推奨する。
FD 活動の推進	英語による授業、アクティブラーニング等のグローバル教育に関する FD 活動を積極的に行う。 特に昭和ポストンを活用して以下のプログラムを実施する。 1. 近郊大学の授業見学、メンタリングに関するセミナー等、学生指導の調査・専門職との意見交換 2. 米国の大学の学生サポート、留学生対応、アドミッション等、大学運営・経営の調査・専門職との意見交換
国際シンポジウムの開催	アジアやポストンの協定大学から教員を招聘し、大学のグローバル化とその運営・経営に関する課題、グローバル人材育成に関する課題について国際シンポジウムを開催する。

日本人学生の留学を促進するための環境整備

日本人学生に対する動機付けや留学を促進するための取組

海外留学履修モデル	各学科 4 年間の履修モデルに留学コースを設定し、学生がどのタイミングで留学し、そのためにはどの科目を学修して準備したら良いか、また、帰国後は専門分野に留学経験をどう生かしていくか道筋を示す。 オリエンテーションなどで留学体験学生がアドバイスを加える。
社会人メンター	留学して日本で働く社会人メンターが、学生にアドバイスしながらキャリアにつなげる留学を意識させる。
情報の提供	海外留学・生活・奨学金等の情報をブログやホームページ等から提供する。 国際交流センターに面談室を設ける等、学生が利用しやすい環境を整える。
専門職の配置	国際交流センターに留学アドバイザーや語学学習アドバイザー等の専門職を配置する。
留学中の支援	教務・学生・キャリア支援、アドミッション担当教職員と学部各学科教職員からグローバル人材育成担当を任命する。 国際交流センターと連携しながら各部署で留学前、留学中、留学後の支援体制を整備する。
昭和ポストン	昭和ポストン Readiness Program の参加学生には、現地と東京の国際交流センターが連携してコンサルテーションと語学学習アドバイスをを行い、学生の希望進路に応じた学習支援を行う。

③グローバル化を推進する学内体制の整備と学内のグローバル化を推進する取組10

プロジェクト評価体制

プロジェクトのマネジメントと評価体制

マネジメント体制	<p>学長を議長とする最終決定機関「大学部局長会」の下に「グローバル人材育成プロジェクト委員会」を設置し、プロジェクトを管理する。委員会での決定事項は、大学部局長会で承認を受ける体制を敷く。</p> <p>委員会は、構想責任者の副学長が委員長、実施責任者の国際交流センター長が副委員長となり、カリキュラム・留学・昭和ポストン・キャリア支援・入学選考・学生支援等のチームを編成し、プロジェクトを推進する。</p>
評価体制	<p>「グローバル人材育成プロジェクト委員会」の自己評価、学生組織「プロジェクト評価学生委員会」の学生評価、全学部教職員と外部評価委員で組織する「プロジェクト評価委員会」による三段階評価を実施する。</p> <p>PDCA サイクルによる評価システムを構築する。</p> <p>A Plan (実施計画の評価)：毎年3月に実施 カリキュラム、留学、キャリア支援、入学選考、学生支援等の年間計画の自己評価と外部評価</p> <p>B Do (実施状況の評価)：毎年8月と3月の期末に実施 本構想の実行・経過状況に関する自己評価</p> <p>C Check (点検評価)：毎年3月に実施 プロジェクト評価学生委員会、プロジェクト評価委員会による本構想の計画と達成度の評価</p> <p>D Act (改善評価)：毎年3月に実施 点検評価の結果に基づく改善状況の学生と外部委員の評価</p>

情報発信と企業連携

大学の情報発信とプロジェクトを通じた企業との協働

インターネット上の情報公開	<p>主要な大学情報は英語併記で公開する。</p> <p>外国人教員数や研究成果の生産性・水準も英語併記で公開する</p>
留学生への情報提供	<p>入学後の生活（学生寮、日本語や経済支援）、教育（教育支援員）、学位取得に関する項目、進路、交流協定に基づく交換留学プログラムの状況等を英語併記で公開する。</p> <p>シラバスや単位修得の基本方針等の教育情報を英語併記で公開する。</p>
情報発信システムの再構築	<p>公開方針、担当部署、チェック機能等、情報公開機能を検証し、スピーディーで正確な情報発信システムを再構築する。</p>
海外とのネットワーク	<p>Colleges of the Fenway 各大学との人的ネットワークを形成する。</p> <p>インターネットを活用して日米での多文化協働プロジェクトの成果を発表する。</p>
産業界とのネットワーク	<p>企業協働プロジェクト協力企業やプロジェクト評価外部委員と協力し、教育の成果の検証と評価を得る。</p>

第Ⅱ部

2012年度 事業計画

第Ⅱ部 2012年度 事業計画

1 海外大学との交流拡大

1-1 昭和ボストンと近郊大学との提携

- ①短期プログラムや多文化協働プロジェクトの提携のために調査を実施する。
- ②昭和ボストンと近郊大学における授業履修を前提としたカリキュラムの内容検討と確認を進める。

1-2 外国人留学生用短期プログラムの企画・実施

協定大学の学生を対象とし、日本文化・日本社会などに関する講義（英語）、初級日本語の授業、文化体験などを組み合わせた短期プログラムを開講する。2013年度の試行、2014年度の本格開設に向けて、今年度は以下の取組を実施する。

- ①短期プログラムを行っている他大学の調査
- ②短期プログラム内容などの検討
 - ・初級日本語コースの実施方法と費用計算
 - ・英語による日本文化等の講義を行うための講師の選考
 - ・多文化協働プロジェクトとの連携
 - ・留学生受入体制の構築（スタッフ、宿舎など）

1-3 東アジア、東南アジア、欧州等の協定校拡大

- ①本学教員に幅広く協定校候補大学の情報提供を呼びかけ、候補大学を絞り込む。
- ②候補大学と連絡を取り合いながら、直接訪問や関連フェアなどを通じて情報を収集する。
- ③既存協定校との関係をさらに強化するため、協定校を訪問し、担当者とのつながりを強化する。
- ④留学中の学生から海外の生活についてヒアリングする。

1-4 協定校でのキャリア育成イベントの開催

今年度は協定校である上海交通大学でキャリアに関する講演会を実施する。対象は本学からの長期留学、短期集中語学講座の参加学生とする。なお、この講座は本学の必修授業である「女性教養講座」の代替としても位置付ける。

1-5 海外大学とのダブルディグリー制度構築

ダブルディグリー制度の構築と2013年度入学五修生（正規入学は2014年度）を対象としてカリキュラム整備を次のとおり進める。

- ①ダブルディグリーの導入にともなう協定等の見直し
- ②ダブルディグリーの導入にともなう「内規」の作成
- ③本学のカリキュラム整備

④留学で修得した単位認定手続きの整備（全学統一・簡略化）

1-6 多文化協働プロジェクトの企画実施（東京）

クイーンズランド大学生との交流、日本語学校生との交流など、日本で実施可能な「留学生と本学学生との交流」機会を試験的に増やし、多文化協働プロジェクトに必要なネットワークや学生募集のノウハウを蓄積する。

2 [ボストン] 留学支援・プログラム充実

① Supporting Study Abroad and Enriching Showa Boston Program

We will continue to explore new relationships with American universities and expand existing programs to benefit both Japanese and American students. For lower level students, we will continue to develop activity based programs and for the top students we plan to explore more exchange programs with area universities. The Study-Abroad Advisor will also offer workshops for students who are going off to other schools, volunteer programs and internships. We will continue to offer TOEFL workshops as well.

② Distance Learning

With the new distance learning equipment, we will start to offer guest speaker lectures in Boston to Tokyo as well as use the system for orientation and project collaboration. We hope to experiment with different format and audiences. Some of the ideas we hope to experiment will include, but not limited to the followings.

Periodic, scheduled guest speaker lectures in Boston for Tokyo students and visa versa. Long term students like BLIP students have mentioned that they are interested in job hunting workshops and counseling Tokyo offers, so Tokyo specific topics can be transmitted from Tokyo. Trans-Pacific discussions and debates with speakers on both side. For example, have a Japanese female entrepreneur have a discussion with an American female entrepreneur to highlight the differences in their lives and careers.

Another model we would like to explore is the cross-cultural projects for students from both sides. Students from Tokyo and Boston can work on a common theme and periodically get together via the distance learning unit.

3 [東京] 留学支援

3-1 留学ポートフォリオの導入

留学ポートフォリオを開発し、Web上に記録を集積することで帰国後も利用できるようにする。そのため、電子ポートフォリオの導入を今年度中に進める。

3-2 国際交流センターを中心とした留学サポート環境の整備

- ①国際交流センターを拡張または移転し、「学生の交流用スペースの設置」「情報端末や各種資料の整備」「留学アドバイザーの相談コーナーの設置」「語学学習センターの設置」をすすめる。
- ②留学情報を管理するシステムを導入し、留学中の学生の動向の把握とタイムリーかつ的確な情報提供を行うため、システムの概要を検討する。
- ③グローバル人材に必要な能力の測定、分析、アドバイスの仕組みの構築するため、測定ツールを持つ業者を選定し導入を検討する。
- ④留学準備として「危機管理に関する講座」を開講する。
- ⑤本事業の事務局である国際交流センターの円滑な業務と機能強化のため、スタッフの増員を図る。

3-3 留学を見据えたカリキュラムデザイン

- ①留学の体制が整っていない日本語日本文学科、歴史文化学科について、留学を見据えたカリキュラムデザインの構築が可能か否か検討する。
- ②留学を意識した科目群の配置を検討し、既存の他学科科目で留学準備科目・帰国後の補足発展科目になり得るものについて確認・整理を開始する。
- ③協定校のあるアメリカ・カナダ・韓国・中国・東南アジア（ベトナム）・東欧（ポーランド）について、集中講義形式で学ぶ科目を設けるなど、留学先の国の歴史および文化を学ぶ科目の設置を検討する。
- ④4年間で留学可能な時期、および留学を想定した履修モデルを構築する。
- ⑤日本語日本文学科、歴史文化学科の外国語英語クラスを同一時間帯に配置し、より細分化されたレベル分けクラスを編成するなど、語学力向上に効果的な体制を整える。
- ⑥アジアの協定校（ハノイ国家大学）に留学するためのベトナム語講座（一般教養科目）の開設を検討する。
- ⑦アジアやヨーロッパの協定校で授業履修が可能な語学力を育成するため、英語以外の外国語の効果的なカリキュラム編成を総合教育センターに依頼する。

3-4 留学経験を生かした就職支援

- ①認定留学先以外の個人留学の状況を把握する仕組みを構築する。
- ②留学経験を活かせる国内インターンシップ先の開拓を行う。
- ③留学で学んだ外国語や知識を活用したインターンシップの増加を目指す。

4 学生の外国語力向上

4-1 英語レベルの測定と強化

- ①TOEIC® IP テストを実施することで、英語力のレベル把握のための材料とする。
- ②TOEIC® 受験対策集中講座を開設する。
- ③英文ライティングの学習支援の仕組みを構築する。
 - 1) 英語論文・概要の作成講座＋添削
 - 2) 英語の論文作成に関する図書の充実

- ④英語学習アドバイザーの設置とワークショップ企画を検討する。
- ⑤語学力測定と分析のためのテストを検討する。

4-2 4年制英語カリキュラムの編成

人間文化学部では、英語系の英語コミュニケーション学科と国際学科以外に、非英語系の日本語日本文学科と歴史文化学科があり、学部全体のグローバル化を目指すためには非英語系学科のカリキュラムを再編する必要がある。そこで日本語日本文学科、歴史文化学科の外国語英語の見直しを次の通り進める。

- ①1年次対象の基礎クラス（英語 U-A IA / IIA、IB / IIB）の内容を見直す。
- ②授業外の自主学習の習慣づけを目指して、Eラーニング（アルクネットアカデミー）を授業の一部として導入する計画を進める。
- ③語学力測定WGと連携し、TOEIC®以外の測定ツールを模索する。
- ④外国語英語のコーディネータを置き、対象学科のクラス運営の確認、調整を行う。

4-3 Readiness Program と Bridge Program の企画設置

- ①東京校教務部と連携して、ボストン校で実施する Readiness Program と Bridge Program のカリキュラムを作成する。
- ②Readiness Program の中で、国際学科学生がフランス語・ドイツ語・スペイン語に加え、中国語・韓国語も履修できるように検討する。
- ③Bridge Program に関して、近郊大学における授業履修を前提としたカリキュラムを検討する。

4-4 国際教養関連科目の開設

人間文化学部の副専攻として「国際教養関連科目」を2015年度から開設する方向で準備をする。Bridge Program と連動しているため、昭和ボストンと連絡をとりながらカリキュラムを作成する。

4-5 入学前の留学経験 / 語学力を重視した入試の制度化

2014年度入試からの語学力重視の入試制度導入を目指す。

5 外国人留学生支援

5-1 外国人留学生学習支援

- ①留学生の日本語学習個別ニーズに応えるために、外部の日本語教師養成機関（日本語学校）と提携し、教師養成プログラム受講中の社会人をボランティアチューターとして本学に迎え、希望留

学生との一対一の日本語支援活動を行う。これにより、個々の留学生の日本語学習ニーズに対応するだけでなく、学内では経験し難い日本人社会人との一対一の接触経験をもたせ、留学生の日本社会に関する理解の幅を広げることが可能になる。

- ②正規学生ではない科目履修留学生（協定校からの交換学生等）は、通常の履修手続きとは異なる処理が必要であるため、履修登録に際して個別指導が必要になる。来年度本学の履修登録方法が変更されることから、それに合わせて科目履修留学生および指導担当者にとって合理的な履修マニュアルを作成する。

5-2 外国人留学生入試の改善

外国人留学生入試の改善を目的として、留学生推薦入試（指定校制）実施について、全学的な観点から検討を進めていく。

5-3 外国人留学生の就職支援

- ①他大学が留学生に対し、どのような就職支援を実施しているのか調査を行う。
- ②就職についての意識・希望調査を行い、実態の把握に努める。

5-4 外国人留学生の安全・健康管理

- ①私費留学生・科目等履修生の健康診断の制度化を図る。また、留学生の提出書類を確認し、健康診断の実施の有無について確認作業を進める。
- ②多くの国から留学生を受け入れるにあたり、健康相談・メンタルケア・宗教上の問題に対する人材の配置を検討する。

6 教員のグローバル教育力向上

6-1 教員研修

- ①グローバル人材育成に関連させたテーマの「FD 講演会」を実施する。
- ②グローバル化を実践している国内大学の実情を調査する。
- ③昭和ボストン教員と本学教員との合同の勉強会を開催する。

6-2 外国人教員の増員

2013年度に向けた本事業担当の専任教員採用の検討を行う。

7 職員のグローバル教育力向上

7-1 職員研修

昭和ボストンの施設と業務内容の視察、およびボストン地区の大学視察を目的とし、職員 5 名程度をボストンに派遣する。

7-2 事務職員の TOEIC® スコア向上

- ①職員の TOEIC® スコアを把握するため、2012 年 3 月に実施した TOEIC® 未受験者を中心に追加テストを行う。
- ② TOEIC® スコア 525 点以上の職員（11 名）を対象に外部プログラムを利用した英語力強化のための研修を実施する。

8 大学の国際化

8-1 シラバス、授業概要の英語化

授業概要を英語化する準備について、科目や必要な項目について検討を開始し、2013 年度に実行するため、次の内容を協議する。

- ①対象科目、対象項目
- ②公開方法
- ③プロジェクト全体の進行状況に応じた作業工程
- ④現在のシラバスの様式に英語併記するか、様式を変更する
- ⑤翻訳の外部委託、翻訳後の確認など、公開までの工程等

8-2 各種規定、学内文書の英語化

- ①各事務部署で英語化に必要な文書の洗い出しを行い、優先順位を決定する。その際、日本語能力の低い外国人留学生や外国人教員、外国からの来客などに対して、どの文書の英語版が必要か、という視点で洗い出しを行う。
- ②英語版の媒体、情報提供の方法などを検討する。
- ③優先度の高いものから翻訳会社に委託し、一部の文書については 2012 年度内に完成させる。

8-3 WEB サイト・印刷物による広報

- ①海外への留学希望者、海外からの留学希望者への日常的な情報提供を充実させるため、大学の英語版サイトおよび本学の留学担当部署である国際交流センターのウェブサイトをリニューアルして大学のグローバル化に対応する。
- ②本事業に関する広報と実績・成果の報告ツールとしてウェブサイトを活用する。

- ③本学の海外協定校プログラム、留学生向けカリキュラムなどの情報を集約し、在学生や留学希望者に発信する。
- ④海外の大学生にも情報を提供できるよう、公式サイトが多言語化を目指していく。

8-4 教学マネジメント（GPA, ナンバリング）

2014年度カリキュラムからナンバリングを導入できるか検討し、案を作成する。
（他大学の状況調査、ナンバリングの方法検討、学生便覧カリキュラム表の改定案作成等）

9 本事業に関する情報発信

9-1 WEB/ 印刷物を通じた成果発表と広報

- ①外国人留学生を対象に大学情報を発信するため、外国人留学生を主ターゲットとした多言語による入学案内パンフレットの作成、入学案内サイトの企画・制作を進める。そのため、在籍する留学生へのヒアリング、留学生の増加に効果的な言語の選定、ストロングポイントの整理をしていく。
- ②本推進事業の目的と採択された本学の取組や特長を学内外に広く周知し、同時に各年度の行動計画と目標、5年間で整備すべきグローバル環境・教育内容を取組関係者に紹介する。使用するツールと対象は以下の通り。
 - 1) 推進事業の選定を周知するチラシ・ポスターの作成
事業対象となる在学生・教職員・入学希望者・高校教師や塾講師といった学外関係者などに広く周知するためポスター掲示・チラシ配布を行った（11月中完成予定）
 - 2) 採択された取組を紹介するパンフレット（日英併記）の作成
国内外の関係者に対し、採択された取組を周知・広報するために配布（年内完成予定）

9-2 シンポジウムの開催

大学のグローバル化とその運営・経営に関する課題、あるいはグローバル人材育成に関する課題について第1回シンポジウムをポストンで開催する。

10 本事業に関する評価

- ①グローバル人材育成プロジェクト委員会による自己評価の実施
- ②学生会クラス委員（人間文化学部）による学生評価の実施
- ③プロジェクト評価委員会による外部評価の実施

第Ⅲ部

2012年度 事業報告

第Ⅲ部 2012年度 事業報告

1 海外大学との交流拡大

1-1 昭和ボストンと近郊大学との提携

ボストン滞在学生の授業履修、4週間の Bridge Program、東京で行う短期プログラムおよび日本語集中プログラムなどを実現するため、ボストン近郊大学との提携強化を目的として国際国流センターから職員を1ヵ月間出張させ、昭和ボストンと協力しながらボストン近郊大学を訪問し情報収集を行った。

主な訪問大学や教育機関は以下の通り。

Colleges of Fenway、Harvard University RIJS、The Academic Internship Council、Wellesley College、Wheelock College、Mt. Ida College、Boston University

2013年7月に予定している東京での短期プログラムについて、複数の大学から学生募集の協力を得られたほか、ボストン滞在学生の授業参加や特別プログラムの開設についても前向きな回答の得られた大学があった。

1-2 外国人留学生用短期プログラムの企画・実施

短期プログラム検討の情報収集として、韓国 西江大学校、ソウル女子大学、淑明女子大学、国民大学を訪問し、大学の短期プログラム情報を収集した。

短期プログラムについては、詳細を計画する段階にきている。それも踏まえて、下記の通り短期プログラムの企画をすすめることとなった。

日 程：2013年7月22日（月）～8月9日（金）

内 容：英語で行う Japan Studies 及び内容に関連したフィールドワーク。多文化協働プロジェクト。ホームステイ、1日旅行、文化体験等。

参加者：本学学生 15～20名、海外学生 15～20名

日本人学生については、2013年度前期履修科目とする。海外学生の参加者募集は3月より開始している。この他に、日本語学習期間の短い留学生を海外から集めて行う1学期間の日本語集中プログラムの提供も検討を始めており、2013年に募集を行い、2014年から開始する予定である。

1-3 東アジア、東南アジア、欧州等の協定校拡大

海外の協定校候補大学について、学内教員から推薦を募った。また、既存の協定校との維持を含め、以下の通り海外の大学を訪問し、協定校に関する協議を実施した。

- ① 12月 上海 3名（上海交通大学ダブルディグリー関係）
- ② 12月 ソウル 5名（協定校候補大学訪問・ソウル女子大学ダブルディグリー関係）
- ③ 3月 香港（APAIE）1名
- ④ 3月 韓国（西江大学）日本語実習引率を兼ねて 1名
- ⑤ 2月 カナダ（ロイヤルローズ大学）海外インターンシップの視察 2名
- ⑥ 2月 ドイツ（Europa-Universität Viadrina Frankfurt(Oder), Humboldt-Universität zu Berlin）1名

協定校は10月にワルシャワ大学、2月にカナダ Royal Roads University と協定を結んだほか、来年度初めまでに韓国2大学、台湾1大学と新たに協定を結ぶこととなった。

また、既存の協定校である上海交通大学とは新たにダブルディグリーの実施で合意し、来年度初めまでに協定書が調印できる見込みである。

1-4 協定校でのキャリア育成イベントの開催

キャリア育成イベントとして、上海交通大学へ留学中の本学学生を対象にして日本語によるキャリア支援講演会を実施した。

【キャリア支援講演会】

日時：2013年2月23日（土）13:00～14:30

場所：上海交通大学国際教育学院 211教室

参加者：25名（昭和女子大学からの留学生24名および他大学生1名）

講師：上海西科姆保安服务有限公司（上海SECOM）市場営業部

豊巻未紀子氏（本学卒業生）

和趣（上海）貿易有限公司（株式会社キュアテックスより出向中）

JETRO 主催アジア・キャラバン事業の上海常設ショールームマネージャー

高橋玲子氏

1-5 海外大学とのダブルディグリー制度構築

ダブルディグリー制度の概要について、海外交流専門委員会と教務部委員会で承認を得た。この制度によって、協定校へ留学し単位互換の活用で、卒業時に本学の学位のほか、留学先大学の学位も取得できる。本学ならびに留学先大学も、教育課程は一般学生と同様であるが、両大学とも修得単位の一部をそれぞれで単位認定し、2つの大学の卒業要件を満たし2大学の学位を取得できるようになる。

この制度は2013年度から国際学科と上海交通大学国際教育学院の間で開始（本学学生派遣のみ）する。将来的に他学科でも実施する予定である。

2013年度は五修生（本学附属中高部の授業参加制度）を対象とし開始するが、一般学生についても検討していく。（人数は3～5名、留学時期は2年次後期～4年次前期）

2013年5月中旬頃までに留学者を決定し、5月末には上海交通大学へ入学登録する予定となっている。

ソウル女子大学とも実施する方向で協議を進めているが、派遣および受け入れの同時実施を考えているため、具体的な調整にはまだ時間を要する。

①上海交通大学との協議

期 間：2012年12月13日（木）～15日（土）

出張者：教員2名（国際学科）、職員1名（国際交流）

カリキュラムのすり合わせ、5年間にわたるスケジュールを確認した。卒業論文の扱いなどについては、帰国後調整を行った。2012年度中にダブルディグリーの協定を締結することを確認した。

②ソウル女子大学との協議

期間：2012年12月25日（火）～12月28日（金）

出張者：教員2名（国際学科）、職員3名（国際交流、教務、学長室）

9月にソウル女子大学から提示されたダブルディグリーのカリキュラムについて検討した。提示されたカリキュラムを再度持ちかえり、国際学科のカリキュラムとのすり合わせをした。

1-6 多文化協働プロジェクトの企画実施（東京）

2012年12月にクイーンズランド大学の学生17名および引率教員を招いて、本学学生26名との交流会を行った。学生主体での企画・運営を行い、ここで得られた課題の整理を行い、さらに韓国やその他の海外大学でのプログラムを調査した結果、2013年7月に予定している短期プログラムの中で、多文化協働プロジェクトを実施することとなった。

このプログラム期間中に、与えられたテーマに従って、本学学生と海外大学の学生が合同で調査・研究した成果を最終日に発表する予定である。

2 [ボストン] 留学支援・プログラム充実 [SB]

① The very first GP activity in Showa Boston was Prof. Fukuzawa's visit to Boston from October 15 until the 18th. She conducted workshops and lectures on career development and study-abroad, and professional development for faculty and staff the Japanese job hunting and employment system.

② With the GP money and mandate to globalize the curriculum for Japanese Language and Literature Department and History and Culture Department students, we hired a part-time faculty to develop a 2-week program titled U.S. ?Japan Culture and History Program. Pat Murray, the faculty who developed the program, is bilingual in Japanese and English, studied history of U.S.-Japan relations and has close connections at institutions such as Harvard University Reischauer Institute, the Japan Society, the Kaji Aso Studio, and the Children's Museum Japan Program. She used her knowledge and connections to the full extent for this program and the students were extremely satisfied with the program.

③ One of the programs the new GP Coordinator launched was the "Discovering U.S.History" field trips for Showa students and American students. During the month of March, the Coordinator,

Virginia Keniry, organized three historic trips to Sturbridge Village, Newport and New Bedford. She recruited American students from partner universities. The Japanese students and American students studied American history together on these trips and shared their culture with each other. Total 11 American students and 18 Showa students attended the program.

- ④ The vision of GP is visible in the new Global Education Center and the Global Education Media Lab. The Global Education Center will house the GP Coordinator, the study-abroad advisor, and the volunteer/internship coordinator, as well as computer stations for students to do research on global education and global careers, and a meeting space. Across the hall from the GEC is the Global Education Media Lab which will have a Smartboard and other IT equipment for cross-cultural projects and activities for the students. We envision having American and Japanese students on either side of the Pacific to share their ideas and projects through the distance learning equipment we are getting.

3[東京] 留学支援

3-1 留学ポートフォリオの導入

留学ポートフォリオの導入について、「留学による学生の成長を高める」「教員が学生指導に役立てる」「留学プログラムを検証する」の3点確認のもと、教務部委員会で決定した。2012年度は試行として留学中の国際学科28名を対象に運用を開始した。

2013年度は範囲を広げて、英語コミュニケーション学科30名、国際学科180名とサマーセッションに参加する各学科の学生60名、その他短期留学生を対象として引き続き試行する。

ポートフォリオの活用によって教員は、学習の「結果」だけでなく「過程」を評価することが可能となり、きめ細かな指導を実現することが期待できる。

<ポートフォリオの分類>

- ・語学
- ・課外活動
- ・キャリア形成
- ・その他

<プロフィール項目>

- ・学科
- ・出身地
- ・留学中にやっていたこと
- ・取得資格
- ・クラブ/サークル
- ・行ったことのある国、行ってみたい国
- ・趣味
- ・将来の夢、希望の進路
- ・自己アピール

<ポートフォリオに保管する内容>

●学生

- ・留学期間中のボランティアやインターンシップの記録
- ・大学が用意したアンケート

●教員（大学）

- ・留学中に使用する教材の留学前の提示
- ・TOEIC®等のスコア
- ・その他各学科や担当教員で必要なもの

本ポートフォリオを実施する目的は、自身を客観視し、課題を発見して、改善修正できるような日常習慣を学生に習得させ、自律的な成長を促すためである。また、指導教員が留学中の学生への動機づけを行い、学生の成長を支援・推進するためでもある。

本ポートフォリオの学生個人のページは、学生本人および学科関係教員（学科長、教務部委員、学生部委員、クラスアドバイザー他）と留学アドバイザーが閲覧できるようにする。なお、学生相互の閲覧およびSNS的サービスは展開しない。

学生は、留学中の学習エビデンス（成果物）・生活記録の蓄積、定期的実施するアンケートへの回答等を通じて、自身の履歴を<学修カルテ（仮称）>に時系列的に残す。

3-2 国際交流センターを中心とした留学サポート環境の整備

本学において学生がもっとも集まる場所である 80 年館学生ホール隣のインフォメーションルーム（掲示板室）を改装し、「グローバルラウンジ」を開設した。この新しいスペースは、留学や語学学習に関する情報提供のイベントや、留学準備のためのオリエンテーション等を開催するとともに、デジタルサイネージやチラシ等の媒体を使って、留学に関する情報を学生に提供する場所である。2013 年 3 月 28 日には、遠隔授業システムを使って昭和ボストンと回線をつなぎ、4 月に留学する予定の学生を中心にオープニングセレモニーと留学前オリエンテーションを行った。

また、国際交流センターの事務室隣に「グローバルオフィス」を設置した。このスペースは、海外からの来客とのミーティングスペースとしての機能に加え、学生の語学や留学に関するカウンセリングサービスのためのスペースである。ここには新たに語学学習アドバイザー、英文ライティングサポーター、留学カウンセラーの専門家を配置し、学生との個別相談やグループカウンセリング等を行っていく予定である。

留学情報を管理するシステムについては、ポートフォリオシステムの中に組み込む仕様を検討したが、残念ながら効率的な管理につながらないことが判明し導入を断念、新たな仕組みを検討することになった。

計画していたグローバル人材に必要な能力の測定ツールについては、ひとまず学部全体で実施することはせず、導入を希望する学科毎に対応することとなった。

留学準備に向けた危機管理講座は、全学的なものは実施せずに、個別の留学プログラムのオリエンテーションの中で実施した。

国際交流センターの強化として、11 月に広報・Web コミュニケーション担当者 1 名、12 月に補助金執行と文科省報告作成担当者 1 名を増員した。今年度採用を検討していた留学アドバイザーと語学アドバイザー兼翻訳・英文構成担当者については、次年度からの配置となった。来年度からは専任職員も 2 名増員となり、グローバル人材育成推進事業を担う事務部署として強化は十分に図られている。

3-3 留学を見据えたカリキュラムデザイン

4年間で留学可能な時期、および留学を想定した履修モデルは、2013年度入学者から提示することを決定した。これまでの外国語英語は同一学科内でのレベル分けだったところ、日本語日本文学科、歴史文化学科の2学科合同にすることにより、8クラスに細分化でき、英語力のレベルに応じた授業を実施することが可能となる。

語学力向上に効果的な科目の増設、ベトナム語講座は検討した結果、歴史文化学科の専門科目で開設し、他学科学生も履修できる方向で進めることになった。

3-4 留学経験を生かした就職支援

個人の留学の状況を把握し、進路用のデータベースに登録した。

これによって、就職相談時に留学経験を把握し相談を受ける環境が整うことになった。

留学経験を活かせるインターンシップについては、外資系の企業に受入交渉を開始した。受け入れが決まれば外国語を利用して実習ができる予定である。今後も留学経験を活かせるインターンシップ先の開拓を更に増強していく。

4 学生の外国語力向上

4-1 英語レベルの測定と強化

① TOEIC® IP テスト

人間文化学部を中心に2回実施した。

2012年12月15日(土)受験者数264名

2013年2月2日(土)受験者数730名

② TOEIC® レベル別セミナー

TOEIC® スコア向上のためのレベル別対策講座を開催した。

2013年1月7日(月) ① 900点をめざすコース

② 700点をめざすコース

2013年1月8日(月) ③ 700点をめざすコース

④ 500点をめざすコース

「700点をめざすコース」は希望者が多かったため、1コマ増設した。セミナーの内容については大変好評であり、担当講師からも学生が熱心に受講していたという感想があった。

③ 英文サマリーライティング・ワークショップと英文添削

英文ライティング支援として、卒業論文で英文サマリーを作成する学生に対して「英文サマリーライティング・ワークショップ」を開催した。学生は、受講後各自で英文サマリーを作成し、担当講師がその添削を行った。参加した学生にとっては大変役立つプログラムとなった。

④ 英語学習アドバイザーの設置準備

英語教育プログラムにかかる学習支援業務のため2013年4月から1年にわたって英語学習アドバイザーを設置する。その業務内容、支援体制、運用方法等の確認を行った。

⑤ 語学力測定と分析のためのテストの検討

2013年度人間文化学部入学者に対して、語学力測定のために、入学直後および各年次の学年末の合計5回、GTECを受験させることとした。入学直後に実施するテストは、英語クラスのプレ

イスメントテストも兼ねることになる。

⑥ Eラーニング教材の導入

英語のレベル向上を目指して、「アルクネットアカデミー」の「英語入門コース」「Power Words コースプラス」を導入した。これらの教材は、学習者の個別学習状況を教員が把握できるため、学生の学習記録をもとに教員が個別指導が可能となる。

「英語入門コース」は、英語基礎力を向上させることが目的で、対象学生は全学生であるが、特に外国語英語の履修者と留学予定者を中心に利用させる。試行として、2012年度の外国語英語の履修者に対して、春季休暇期間中に当該教材を用いて学習させた。また、留学予定者でTOEIC®500点以下の学生に対して、当該教材で留学準備学習を実施した。留学前に基礎力を充実させることで、留学中に大きな成果を上げることが期待できる。

「Power Words コースプラス」は、語彙力増強のプログラムで、留学前の学生対象に留学に必要な語彙力を身につけさせるために、また留学帰国者には、留学中に身につけた語彙・語学力をさらに高め、TOEIC®やTOEFLなどの試験で高得点を目指すために導入した。学習を継続させることで個人の能力を伸ばし、語学力の向上・維持が期待できる。2012年度は試行的に、留学前と留学後の学生を対象に春季休暇期間中に学習させた。

⑦ グローバル人材育成推進講座「グローバル社会を生き抜くために：ITの効果的な活用法」の実施

人間文化学部の学生を主対象として講座を開催した。参加学生は「グローバル社会で正しい情報を得るためには語学学習が重要である」ことを理解すると同時に、本プロジェクトの意義を認識することができた。

4-2 4年制英語カリキュラムの編成

人間文化学部全体のグローバル化を目指すため、非英語系学科（日本語日本文学科と歴史文化学科）の「外国語英語」カリキュラムの再編に着手した。2013年度1年次対象の外国語英語基礎科目（英語U-A IA / IIA, IB / IIB）について、日本語日本文学科と歴史文化学科で開講曜日・講時を揃え、2学科合わせて8クラスにレベル分けを行う。学科単独でのレベル分けよりも、レベル数が増えるため、学生の学力に応じた授業を行うことが期待できる。このレベル分けにはGTECを導入し、前期末および後期末にも同じテストを受験して、学力の伸長を確認する。

さらに授業にEラーニングを導入し、授業内での英語学習アドバイザーの個人指導に加え、授業外での学習を課すことにより、自主的な学習習慣の習得を目指す。

当該授業の運営状況の把握および担当教員への連絡のためコーディネータを設置した。担当教員に対しては説明会を実施し、本事業と外国語英語再編の説明、シラバス、テキストを含む授業内容の説明、授業に導入するEラーニングの紹介、授業で利用するiPadの使用手法説明などを行った。

4-3 Readiness Program と Bridge Program の企画設置

①前期と後期の15週間のReadiness Programと4週間のBridge Programのカリキュラムの大枠を東京校教務部と連携して作成した。Readiness Programはコア科目と選択科目から構成されていて、基礎的な英語スキルを学ぶと同時に、学生は多彩な科目群から各自の関心に応じた内容の科目を選択して学ぶことができる。英語系学科学生だけでなく、非英語系学生にとっても留学の動機付けとなるよう考慮されている。2月に東京校教務部委員を中心とした教員がボストン校に出張し、各プログラムの詳細について協議した。2014年度からの実施を目指して、継続して検討を行う。

② Readiness Programの中で国際学科学生がフランス語・ドイツ語・スペイン語に加え、中国語・

韓国語のいずれかを選択履修することについて協議した結果、内容および運用方法について継続して検討することになった。

- ③ Bridge Program の近郊大学における授業履修を前提としたカリキュラムの検討については、継続して提携校となる大学との交渉を行った。

4-4 国際教養関連科目の開設

国際教養関連科目は昭和ボストンBridge Program と連動するため、本学だけでは開設することができず、現在も昭和ボストンとカリキュラムの調整を進めている。

昭和ボストンだけではなく、海外の他大学の授業を国際教養関連科目等に取り入れることも効果的であることから、当初の構想にはなかったが、遠隔授業システムを導入することを決定した。

遠隔授業システムの導入に際して、先行している学習院女子大学を視察した。学習院女子大学では、ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学に6カ月間留学した学生20名が履修している授業内で、遠隔授業システムを利用し実施していた。学習院女子大学の学生がカナダにいる教員から質問を受けたり、また、カナダで授業を受けている学生と意見交換をした。留学後も学生がモチベーションを維持し、語学力の向上のため学習を継続させ、グローバルな視点を高めるなど大変効果的である。本学での実施を想定すると、昭和ボストンとは時差があるため、課題もあるが、遠隔授業システムの導入によりボストンの授業やセミナーを留学帰国生が受験できる。また、留学中と留学前の学生の交流・情報交換を図ることもできるようになる。

協定校である上海交通大学も、前向きに検討したいとのことで、本学ではアジア圏の学生と英語でディスカッションする授業の開講を検討する。

また、時差の問題が少ないオセアニアでは遠隔授業をしている大学が多く、すでに遠隔授業システムを持っているため、本学がこの設備を導入すればすぐに遠隔授業が可能となるので、協定校であるクイーンズランド大学の状況を把握のうえ進める。

4-5 入学前の留学経験 / 語学力を重視した入試の制度化

グローバル人材育成推進事業を中心になって牽引する、すでに留学経験のある生徒や語学力の高い生徒を受け入れるため、アドミッション企画会議を中心に「グローバル AO 入試案」を作成し、関係各所と協議をおこなった。

しかし、新入試の導入目的および具体的な入試案双方ともにまとまらなかったため、2013年度の新入試実施は見送り、次年度継続審議することとなった。

広報戦略の一環として新入試を打ち出す以上、入試のコンセプトを受験生に分かりやすく伝えねばならず、カリキュラムが走り始めている現時点で制度を固めるよりも、本プロジェクトが具体的に動き出す2013年度の状況を念頭におきつつ、次年度に制度設計する必要性を感じたことも見送りの判断の背景にある。また合意には至らなかったものの、一部の学科からは新入試の創設自体については、熱意のある意見が出されている。来年度計画では関係各所とのすり合わせを進めていく。

5 外国人留学生支援

5-1 外国人留学生学習支援

留学生の日本語学習個別ニーズに応えるために、留学生4名、日本人ボランティアチューター4名をそれぞれペアにし、11月～2月上旬の間、各10回程度(各回1時間程度)、日本語学習の支援活動を実施した。参加留学生数は少なかったが、それぞれのペアで充実した支援をすることができた。

サポートを受けた留学生からは以下のような評価を受けた。

- ・来日間もない留学生は、日本語の会話に慣れることを目指し、会話を中心にした活動をした結果、数か月で日本語の聞き取りと会話能力が上達したと感じた。
- ・卒業論文に取り組んでいた留学生は、日本人支援者の協力を得て論文を仕上げることができたことを大変感謝していた。
- ・日本語学習歴の長い上級の留学生にとっては、普段の生活では日本人に聞けない日本語に対する疑問を解決する場所、より洗練された表現を指摘してもらえる機会となった。
- ・参加留学生全員が今後も継続してこのような取り組みを大学として留学生に提供してほしいとの評価を受けた。

このような取組に積極的に参加する留学生の多くは、当該学期に本学に在籍を始めた者であり、他の日本語指導を必要としている留学生に本活動が浸透しているとは言い難い。教師養成機関ではボランティアチューターを希望する者が多いことから、今後は留学生への働きかけを工夫し、より多くの留学生が本取組に参加するよう指導していきたい。

また、来年度本学の履修登録方法が変更されることにともない、今まで担当者任せになっていた科目履修生の履修指導用マニュアルを整えた。それによって、今後協定校等からの科目履修生が増えた時の履修指導に対応できるようになり、留学生の学習支援体制を強化することにつながった。

5-2 外国人留学生入試の改善

海外交流専門委員会とアドミッション企画会議との連携のもと、外国人留学生入試の改革に向けて情報収集および入試の改善案を作成した。

入試概要の原案はできあがっており、2014年度入試からの実施に向けて学科との協議段階に入っている。

5-3 外国人留学生の就職支援

外国人留学生に対する就職支援を強化するため、他大学の留学生に対する就職支援状況調査を開始した。グローバル化に対して先駆的な大学の視察を通して、留学生の就職状況、就職支援、就職する際の問題点等の把握に努めた。

また、1月から2月にかけて外国人留学生へアンケートを実施した。科目等履修生を含めた56名の留学生のうち、25名から回答を集めることができた。そのうち、22名が日本企業で就職を希望している。これは留学生の殆どが就職希望と考えるのではなく、就職を希望している学生が回答をしたとも考えられる。

日本企業へ就職を志望する22名のうち、半数以上が日本国内の就職を希望している。このことから、今後も日本企業への就職活動を中心に支援することを計画していきたい。

学生の就職活動上の希望や悩みについては日本人学生と殆ど変わらないことがわかった。語学力、専門の知識や技術を生かした職業を志望し、インターネット情報や大学の就職担当部署、留学生担当部門、友人たちからの情報提供を期待し、企業情報の収集や就職活動の仕方、面接対策、筆記試験対策、就職活動と学業との両立等で悩む姿が回答から浮かび上がった。就職関係の情報については、留学生を採用している企業情報を含め「情報が少ない」と感じていることもわかった。今後は学生が満足のできる情報提供を計画したい。

5-4 外国人留学生の安全・健康管理

12月に定期健康診断を受けていない科目等履修生の留学生5名に対して、胸部X線撮影を実施した。従来、科目等履修生の健康状況は、自己申告（所定の問診票記載）であったため今回から医師の診断による健康管理を行うことにした。これまでは、医療機関での受診を自費で行う指導をしていたが、留学生の支援として、今後は大学として実施する。また、来年度から留学生の心身の健康をサポートするため、週2回5時間のカウンセラー配置することになった。今年度はカウンセラーの募集要項の作成など、来年度始動に向けて検討を進めた。

6 教員のグローバル教育力向上

6-1 教員研修

教員のグローバル教育力向上を目指して、今年度はFD活動の一環として講演会の実施と国内他大学の視察、昭和ポストン教員との合同勉強会を実施した。

① グローバル人材育成に関連させたテーマの「FD講演会」実施

日 時：2013年1月23日（水）15:30～17:00

場 所：本学学園本部館大会議室

テーマ：グローバル人材育成と大学の取組課題

講 師：明治大学国際連携機構特任教授 芦沢真五氏

参加者：53名

講演の前半では、留学生の現状について大局的な説明がなされ、留学生受入れの3つの理念、1) 経済支援モデル・外交戦略モデル、2) 顧客モデル・戦略的「留学立国」モデル、3) 高度人材獲得モデル、それぞれについての説明があった。世界的な人材獲得に乗り遅れているとの危機感、日本人学生がグローバル人材になっていない問題が指摘された。最後に明治大学でのグローバル人材育成推進事業の現状と2012年度から採択された3事業について、全学的取組みを実現するため、予算を使う点は使ってほしいとの立場で教員のモチベーションを高める戦略をとったとの説明があった。講演後の参加者アンケートの結果では、FD講演会に出席して「有意義だった」が約7割、講演を聞いてグローバル人材育成に関し何かしらの示唆が「得られた」が約7割、講演後の感想として、「かなり広い範囲を視野にグローバル人材育成についての話が聞けてよかった」「大学の置かれている環境をグローバルに見ることで新たな課題が理解できた」など、参加者にとって本事業への理解

が深まった有意義な講演であったことが伺えた。
また、この講演会の中で、本学の取組みについても、再度確認を行った。

②グローバル化を実践している国内大学の視察

2012年12月15日（土）創価大学 FD フォーラムに参加
2013年2月19日（火）国際教養大学へ視察
2013年3月12日（火）立命館大学へ視察
2013年3月29日（金）大阪大学へ視察

グローバル化が進んでいる大学及び、本学同様にグローバル人材育成推進事業に採択された大学を訪問し、グローバル人材育成に係わる FD 活動の取組について視察と情報交換を実施、各校がこれまで実施してきた教育力向上に関する具体的な事例と今後の課題などを伺った。

訪問校のひとつである国際教養大学（秋田市）では、同大学での今後のグローバル人材育成事業の計画、それに関する FD 活動についての説明を受けた。主な内容としては、教育力の強化のために教員の海外派遣および海外からの研究者招聘を行う、学習支援強化として大学院進学を進めることなどであった。各校の取組内容は、今後、本学における教育力向上に向けた具体的方法を検討するうえで多いに参考になるとと思われる。

③昭和ボストン教員と本学教員との合同勉強会開催

2月18日から22日まで、FD推進委員2名が昭和ボストンに出張し、昭和ボストン教員とFD活動に関する打合せを行った。

東京校と昭和ボストンにおける現在のFD活動内容（特に授業改善に向けての活動について）の詳細について相互に説明し、各校の現状についての情報を共有した。今後の活動計画の基本となる現状と方向性について詳細な確認を行うことができ、次年度以降の取組に繋がる大変有意義な情報交換の機会となった。

6-2 外国人教員の増員

教員派遣・受入について、どのような選択肢があるのかを精査したうえで、実情に合わせた制度の整備や規程の案を取りまとめた。2013年度の制定を目指している。

今後新規に専任教員を採用するにあたっては、外国人教員（外国の大学で教育研究に従事した日本人や外国大学の博士号を取得した日本人を含む）の採用を優先的に検討するようさらに各学科へ要請した。また、公募要領にもその旨を明記することにした。

7 職員のグローバル教育力向上

7-1 職員研修

大学職員のグローバル教育力と能力の向上を目指して今年度は昭和ボストンでの海外研修を実施した。海外研修にあたっては、事前に学内において自主勉強会を勤務終了後に行い、「昭和ボストンを知る」「ボストン近郊の大学等を訪問し、アメリカの大学の図書館の様子、アメリカの大学でのインターンシップの状況を学ぶ」「実際にボストンへ行くことを通じて、国際感覚を養う」「グロー

バル化を推進する為には、何に気付き、何を身につけないといけないのかを探る」というテーマで研修を行うことを決めた。

日 程：2013年2月18日～2013年2月24日

研修参加メンバー：事務センター1名(管理職)、キャリア支援センター1名、図書館1名、情報システム担当1名、総務部1名

内 容：研修参加メンバーの担当主業務に合わせて、「IT」「図書館」「インターンシップ」の3点に主眼を置いて、以下の活動を行った。

①昭和ボストン校視察および現地スタッフとの情報交換

(スチューデントライフ、ITセクション他)

②米国大学視察

(ハーバード大学、エマニュエルカレッジ、シモンズカレッジ)

③ボストン歴史探訪

ボストンパブリックライブラリー等

帰国後、研修参加メンバーによる『出張報告書』を編集し、2013年4月の「職員の集い」にて発表する予定である。

7-2 事務職員の TOEIC® スコア向上

事務職員の英語力向上を目指すため、TOEIC® スコアの把握を実施した。2012年3月と2013年3月の2回、大学部門を中心に184名の職員が受験した。

その結果については人事部で把握を行い、今後の職員研修プランの構築に反映すべく、現在検討を進めている。

英語研修については、外部の語学学習会社と折衝し、大学事務に特化した内容の研修内容を構築した。次年度以降に実施の予定である。

8 大学の国際化

8-1 シラバス、授業概要の英語化

2014年度の公開に向けて、英語版シラバスの様式と次年度の作業スケジュールを検討し、原案を作成した。

8-2 各種規定、学内文書の英語化

学内に存在する各種規定、文書について英語化すべきものを精査した結果、今年度は以下の文書の翻訳を進めた。

①「校務運営規程集」の翻訳(とくに外国人教員に必要な規程を優先する)

他大学の翻訳も参考にしつつ、翻訳業者を選定し2月中旬から翻訳業務を開始し、3月中旬に納

品された。2013年5月頃までに翻訳内容の校正を行い、夏までにホームページで公開する。

② 本学の組織や特有の用語などをまとめた「本学用語集」の作成原案を作成したが、他の部門からの指摘を受け、再度検討し直すこととなった。また、
現行の役職や組織名の英語表記も見直す方向で検討していたが、今年度はそこまで取り組むことができなかった。

③ 「授業に関する取り決め事項」の翻訳

毎年4月に教員に配布するものであるが、2014年度の配布を目指して内容を精査した。

④ 「留学生マニュアル」を作成

今年度は他大の取り組み例を参考に、マニュアルに記載する内容を検討した。日本語力の低い科目等履修生や短期滞在の学生を対象に、次年度以降「留学生マニュアル」を作成する。

⑤ 学内の案内板（サイン）・標識

管轄部門である事務センターに依頼した。

8-3WEB サイト・印刷物による広報

① 国際交流センターホームページ

これまで海外留学や留学生向けの情報は、大学公式サイト内のカテゴリー「国際文化・留学」で案内していたが、説明会やオリエンテーションへの参加を前提としており、サイト上の情報量は少なかった。

留学関係の窓口となる「国際交流センター」のウェブサイトをリニューアルすることで、情報量を増やすと同時に海外プログラムや留学生支援制度を一覧できる情報提供型サイトとした。

本事業の取組に関する広報ツールであると同時に、大学のグローバル化や学生の国際交流に活用できるサイトを目標に開設した。

<コンテンツ>

・ 昭和女子大学の留学プログラム3つの特長

・ 昭和女子大学のグローバル戦略

・ 在学生に向けた留学関連情報

昭和ボストン、認定留学制度、海外研修プログラム、海外協定校などの情報発信だけでなく、留学に必要な手続や英語力資格試験に関する情報も提供する。

・ 外国人留学生向け情報

本学への入学を目指す外国人留学生を対象に、支援制度や入学試験情報などを集約する。

以上のコンテンツに加え、ブログによるリアルタイムの情報提供を行うことにした。

1) プログラムのお知らせ＝協定校認定留学や海外研修などプログラムの情報提供

2) 昭和ボストンブログ＝昭和ボストンでの生活やイベントの情報提供

3) 留学生交流情報＝外国人留学生との交流・イベントの告知や報告

4) 先輩からのメッセージ＝海外留学経験者や外国人留学生の体験談を紹介

② 大学公式英語サイトの改定

英語版で提供する情報の更新、リアルタイムでの発信が可能なサイトを構築した。今後は中国語・韓国語など、多言語でサイトを展開できるよう、閲覧者にとって見やすいメニューの分類と情報の整理を行った。

また、本事業の取組や、短期受け入れプログラム紹介サイトへのリンクを設けるなど、より深い情報へ誘導するサイトを設計した。

大学案内を電子データ化してダウンロードできるようにした。

<コンテンツ>

5つのメニューを構成して情報を幅広く紹介する。

- 1)News =大学からのお知らせやイベントの報告
- 2>About Showa =本学の歴史や教育理念、組織構造
- 3)Academic Programs =教育の特色、大学学部と大学院専攻の紹介
- 4)Admission =入学試験情報、留学生窓口「国際交流センター」へのサイトリンク
- 5)Student Life =クラブ活動や留学プログラムなどの生活情報

8-4 教学マネジメント (GPA, ナンバリング)

2014年度の運用に向けて、他大学の状況について調査し、関係部門で検討を行い、ナンバリングの原案を作成した。

9 本事業に関する情報発信

9-1 WEB/印刷物を通じた成果発表と広報

①外国人留学生を主ターゲットとした多言語による入学案内パンフレットの作成

ターゲットを大学や大学院への進学を目指す外国人留学生に絞り、学部・専攻の専門分野を解説し、奨学金などの支援体制や在籍留学生の体験談などを盛り込むことで、入学後の生活をイメージしやすくした。本学留学のメリットを強調、正規留学の入学試験や短期受け入れプログラムなど多様な受け入れ制度を紹介して希望者にアピールした。

仕様：A5版横×20ページ、フルカラー

言語：日本語・英語・中国語（簡体字）・中国語（繁体字）・韓国語

部数：合計2,100部

日本語・英語・中国語（簡体字）・・・各500部

中国語（繁体字）・韓国語・・・各300部

主なコンテンツ：学部・学科・大学院の紹介／留学生支援体制

留学生の声／国際交流／入試情報／日本の女子教育

<使用方法>

- ・APAIE（アジア太平洋地域の国際教育交流団体）2013年香港大会で配布。
- ・協定大学の新規開拓交渉ツールとして活用。
- ・大学オープンキャンパスや留学生合同進学相談会などで説明資料として使用。
- ・冊子は電子データ化してホームページからダウンロード可能にした。

②外国人留学生を主ターゲットとした入学案内サイトの企画・制作

留学生の窓口となる「国際交流センター」ウェブサイト上にメニュー「外国人留学生の皆さんへ」というメニューを追加し、外国人留学生向けの情報を集約した。

<コンテンツ>

- ・留学先としての昭和女子大学＝大学の特長と留学するメリットを説明
- ・留学生の実績＝留学生数とその出身国、留学後の進路などの情報を公開

- ・留学生支援制度＝奨学金や日本語チューターなど留学生対象の支援制度を紹介
- ・入学試験情報＝私費留学生一般試験、編入学試験、科目等履修生などの入試情報を提供
- ・先輩の声＝在学中の留学生にインタビューしてブログ形式で紹介

<使用方法>

「先輩の声」では、交流イベントや短期受け入れプロジェクトなどの留学生情報を定期的に配信・報告することで、安心・安全・親しみやすい環境であることをアピールして留学意欲を喚起した。

③推進事業の選定を周知するチラシ・ポスターの作成

大学の文化祭（11月）の構内でポスターを掲出してチラシを配布した。

在学生、保護者や入学希望者、近隣住民などに「グローバル人材育成推進事業」に採択されたことを広くアピールすることができた。

本推進事業で目標とする本学のグローバルスキル「3C's = Collaborate/Connect/Create」を明示し、語学学習や留学プログラムの充実はどう取り組むかを説明した。

留学先として本学のボストン・キャンパス、近郊の大学、アジアを含めた海外へと広く視野を広げていくプログラムを紹介した。

<部数>

ポスター：B1判片面・50部

チラシ：A4版両面・1,000部

入学試験合格者向けに3,600部を増刷

<使用方法>

在学生対象：学園祭では人目につきやすい屋外に、複数のポスターを掲出した。

また、大勢が集まるホールや食堂、講堂など、目にとまりやすい場所を中心にポスターを掲出し、チラシも併置した。

人間文化学部だけでなく、全学科を対象にチラシを配布して周知徹底を図った。

学外（受験生）へは、入学試験合格者に発送する入学書類にチラシを同封した。グローバル人材育成推進事業と取組目標を紹介した。

④採択された取組を紹介するパンフレット（日英併記）の作成

採択された取組を紹介するパンフレットを日英併記で作成。本事業の目的と目標、実施計画など特色あるプログラムを掲載する。企業、団体、学校などに配布するほか、協定大学の開拓に役立てた。本事業の柱となる5つのプログラムの特長、全体像との位置づけ、プログラムを通じて培うべき「グローバル力」を紹介した。

日本での生活や大学教育の知識が希薄な海外の大学関係者などに配布できるよう、本学学長の挨拶、世田谷キャンパスや昭和ボストンなど施設紹介、グローバル人材育成推進事業の説明を加えた。

<仕様および部数>

A4×4頁（カラー）・1,000部

<使用方法>

- ・APAIE（アジア太平洋地域の国際教育交流団体）の2013年香港大会で配布。協定大学の新規開拓に役立てた。
- ・ボストン近郊の大学、海外協定校へ、協定プログラムの共同開発や新たな連携の提案に関する資料として活用した。
- ・本事業に携わる事業者や団体の資料として配布した。

9-2 シンポジウムの開催

今年度は高等教育の国際化をテーマに、ボストンにおいてシンポジウムを実施した。主な準備は昭和ボストンで行い、日本からは学長、副学長（構想責任者）、理事長、3学部長、国際交流センター長、キャリア支援部長が参加したほか、事務サポートとして学長室次長、企画広報部長、学園本部付参事、国際交流センター職員が当日の運営をバックアップした。

【プログラム】

・基調講演：Hiroataka Takeuchi(ハーバード大学教授、本学学事顧問)

・パネルディスカッション：

Moderator: Dr. Ronald Provost, President, Showa Boston Institute

Prof. Philip Altbach, Monan University Professor Director, Center for International Higher Education, Boston College

Prof. Michael Lacktorin, Chiba University of Commerce Graduate School of Accounting & Finance, Japan

Prof. Paul Niwa, Emerson College, U.S.-Japan Council Board Member

・ワークショップ

当日の聴講者数：100名(ボストン周辺の大学の関係者)

東京とボストンと連絡を取り合い、昭和ボストンで企画をまとめ、当日は会場となった昭和ボストンのレインボーホールが満席となるなど、ボストンの大学関係者にも本学の取組や日本のグローバル人材育成推進事業が注目されていることがうかがえる。

10 本事業に関する評価

学生から本プログラムの評価を受けるため、1月23日に開催された学友会総会のあと、学友会の人間文化学部クラス委員による評価委員会を開催した。

最初に金子朝子副委員長から事業概要について説明を行い、その後にアンケート調査の形で評価を受けた。クラス委員33名中23名からの回答を得た結果、57%の学生は本事業については知っていたことがわかった。また、留学先の充実など、本事業への期待が高いこともわかった。

グローバル人材育成プロジェクト委員会による自己評価については、各部署、WGからの報告書による評価、来年度計画について審議を行い、承認された。短期間の中で人間文化学部、教務部、学生部、キャリア支援部、アドミッション部、各事務部門が協働して活動した結果、構想に基づく事業の具体化にめどがついた。ただし、構想時に想定した達成度評価などはその仕組みの構築が今後の課題となろう。プロジェクト評価委員会による外部評価は、本事業に採択されてまだ期間が短く、具体的な活動も少ないことから今年度は見送り、2013年7月をめどに開催する方向となった。

第IV部

ボストンシンポジウム報告

U.S.-Japan
Internationalizing Higher Education
Symposium

March 11, 2013
9:00 am - 3:00 pm
Showa Boston Institute
420 Pond Street, Boston, MA

Welcome and Introduction: **Mr. Koji Hirao**, Chairman of the Board, Showa Women's University

Keynote Speaker: Prof. Hirotaka Takeuchi
Harvard University School of Business
Advisor, Showa Women's University, Tokyo, Japan

Panel Discussion: Internationalizing Higher Education: U.S. and Japan

Moderator: Dr. Ronald Provost, Showa Boston Institute
Prof. Philip Altbach, Monan University Professor
Director, Center for International Higher Education, Boston College
Prof. Michael Lacktorin, Chiba University of Commerce
Graduate School of Accounting & Finance, Japan
Prof. Paul Niwa, Emerson College, U.S.-Japan Council Board Member

LUNCH

Workshops

1) Recruiting, Motivating and Supporting Japanese Students to Study Abroad in the U.S.

Educators in Japan and around the world have seen that Japanese students are not studying abroad as much as they used to. What are some of the effective ways to motivate, recruit and support Japanese students?

Moderator : **Prof. Paul Niwa**, Emerson College
Ms. Yukiko Shimmi, Graduate Research Assistant, Center for International Higher Education, Boston College
Mr. Jun Adachi, Consultant, Grew-Bancroft Foundation Board Member
Dr. Donald Ross, Salem State University
Mr. Louis Meucci, Showa Boston Institute

2) Elements of an Ideal Study-Abroad Program in Japan

We will hear from U.S. educators who create and manage study-abroad programs and share ideas on what makes a successful study-abroad program in Japan from a student's point of view. Both short-term and long-term programs will be discussed.

Moderator : **Ms. Junko Abuza**, Showa Boston Institute
Ms. Eiko Torii-Williams, Wellesley College, Co-Director, Japanese Program
Ms. Kiyoko Morita, Tufts University
Prof. Zhigang Liu, Simmons College
Ms. Jenka Eusebio (Showa Boston Student Services, studied abroad at Tokyo University, former JET)

Closing Remarks: **Ms. Mariko Bando**, President, Showa Women's University, Tokyo

U.S.-Japan Internationalizing Higher Education Symposium 報告

日時：2013年3月11日（月）9:00～15:00

場所：Showa Boston Institute for Language and Culture

420 Pond Street Boston, MA 02130 USA

参加者：米大学関係者・ボストン昭和関係者・本学関係者・学生
計約 100 名

1 講演：Internationalizing Higher Education: U.S. and Japan

Prof. Hiroataka Takeuchi ,Harvard University School of Business, Advisor, Showa Women's University

ハーバード大学ビジネススクール教授竹内弘高氏による講演では、まず日本人の米国留学者数の推移が示され、留学者数の減少の原因として以下の3つのEが示された。

English(英語):TOEFLにスピーキングが加わった影響により日本人学生のスコアが下がった。しかし、近年英語教育の低年齢化が進み、国際教育プログラムの充実が見られる。また、英語力重視で採用を決める企業が増加しており、今後英語力の向上が見込める。

Employment(就職):不況と就職困難の影響で留学よりも就職活動を優先する学生が増えている。文科省は秋入学の実施を提案しており、G30等教育の国際化への支援も実施している。また、国内には秋田国際教養大学等の成功事例も生まれており、今後学生の意識変化につながっていくものと考えられる。

E(いい)生活:日本の生活の現状に対する若者の満足度は高い。かつては米国に対する憧れが留学の動機付けとなっていた。アメリカが日本の若者にとり「憧れの国」となるような創造的な取り組みを米国の大学も行う必要がある。

次いで、竹内氏の周囲で行われた二つの取組事例が報告された。

一つは、IXP (Immersion Experience Program) と呼ばれるハーバードビジネススクール学生が参加した取組で、学生の被災地支援をテーマに教育的組織化を行い、活動に対して単位認定する科目である。2012年は学生20名が訪日し、まずリーダーシップ研修を行った。学生は4グループに分かれ、被災地支援で大きな実績を残した4企業のリーダーを訪問（ファーストリテーリング柳井氏、KENIKUKAI Medical Group 理事長、ローソン新浪氏、ヤマト運輸社長）・面談し、企業におけるリーダーシップのあり方について分析を行った。続く二日間の被災地支援では、がれき撤去の手伝いの他、現地の水産業や農業の経営者へのコンサルティングを学生が行った。参加学生に好評であったため、2013年には参加人数が30名となる見込みである。こういったプログラムを企画す



基調講演を行う竹内 弘高本学学事顧問・ハーバード大学大学院教授

る際の観点として、①目的が明確であること、②会社訪問、CEO との面談、コミュニティとの交流など直接的な経験を含む活動であること、③カラオケ・すもう・秋葉原等のエンターテインメントも含むこと、が重要である。

もう一つは、HLAB(Harvard Liberal Arts Beyond Border) と呼ばれるハーバード大学在籍の日本人学部留学生が創設したプログラムである。これは、日本の高校生を対象としてハーバード学生と日本国内の日本人大学生がリベラルアーツを教え、ロールモデルを示すことを目的としたプログラムである。企業の協賛のもと 28 名のハーバード大学部生が参加し、Homeikan という本郷の旅館に宿泊し、活動を行った。参加した高校生 70 名のうち 15 名がハーバード、イエール等のアイビーリーグに出願し、8 名が合格するという米国留学促進の顕著な効果が生まれた。ミニ HLAB は東京以外の小都市でも実施可能であり、普通の高中生でも米国大学への入学が可能であることをロールモデルで示すことによって英語学習の目的意識を高校生に与えることができる。

2 パネルディスカッション Internationalizing Higher Education: U.S. and Japan

以下の 3 名のパネリストによる発表が行われ、最後に質疑応答がなされた。

Professor Philip Altbach, Monan University Professor, Director, Center for International Higher Education, Boston College

ここ 10 年の間に日本から米国への留学生数が 33%減少したことが示すように、日本の国際化は余り順調に進展していない。文科省の政策にも検討が必要である。このためには、世界における日本のイメージをダイナミックでポジティブなものに変えるような積極的な試みが必要であるが、今のところ、韓国、中国のソフトパワーのような積極的な動きは見られない。ヨーロッパについてもスイス、ドイツのように米国内で積極的な活動を行っている国があるが、日本では経済界も教育界も顕著な動きを見せていない。

両国の教育的交流低迷の理由として、日本の①英語力不足 ②物価高 ③就職・留学の募集活動の少なさが挙げられ、今後国を挙げた積極的な行動が求められている。日本企業が学生の国際的経験を評価すること、ソフトカルチャーを初めとした日本の文化的魅力を再認識することが必要である。Internationalization は、globalization という現実、に、ストラテジーをもってアプローチすることである。近年、ブランチキャンパス、ツィニングプログラムという動きがあるが、オーストラリアのように留学生受け入れがビジネスになる傾向もあり、これには注意を要する。

Dr. Michael Lacktorin, Chiba University of Commerce, Graduate School of Accounting & Finance, Japan

秋田国際教養大学の立ち上げ時から教育に関わっており、2004 年設立時には偏差値 40 程度であった地方都市の大学を現在の屈指の難関大学に成長させた経験に基づいて高等教育の国際化に必要な要因を分析した。秋田国際教養大学は、70%を秋田県と市が支出し、30%が学費によって賄われている県立大学である。学生は入学後英語集中授業によって TOEFL500 を達成しその後英語でおこなうコン

テンツのコースを受講する。また海外の協
定校を多数開拓し交換留学を実現した。学
費は 50 万円弱と安い、就職率も含めて
教育効果の高い大学として評価を受けてい
る。これを可能にしたのは強いリーダー
シップ、入試における diversity の確保（面
接と essay）、英語力を高めるコース、海外
ネットワークの開拓である。重要な点とし
て、安定した財政（行政・寄付）、アカデミッ
クダイバーシティ、「教養大学」としての学



パネルディスカッションの様子

際的科目設置による総合的な人間の育成、海外留学提供、全学生の 3 分の 1 を留学生とする、教員の
ダイバーシティ、起業家精神、アクティブラーニング、学内寮の完備、24 時間図書館、学生文化の醸
成、イノベーションとハーモニーとのバランスをとることなどが挙げられた。

Prof. Paul Niwa, Emerson College, U.S.-Japan Council Board Member

IT 技術の進展によって新しいコミュニケーションの方法が生まれ、キャンパスの国際化が可能に
なった。ジャーナリズムの専門家としての実践的経験に基づき、言語学習・言語使用機会の増大、授
業方法の刷新、インターネットによる授業配信等の観点から IT の活用が可能であることを紹介した。
たとえば、Skype は世界中の若者と会話を行うことによる言語習得を可能にした。Verbal Planet など
にチューター役を任せられることもできる。Google Plus などのインターネット上のコミュニティーを利用
することもできる。また、遠隔授業では、たとえば日本側とアメリカ側両方で太平洋戦争で戦った日
本人とアメリカ人兵士を呼び、自分たちの経験を話してもらいそれを遠隔授業のテクノロジーを利用
して議論をするなど、一方通行ではない授業ができる。

また、このテクノロジーを利用して海を越えた合同プロジェクトも可能になる。たとえば、現在
You Tube では、役に立つビデオがたくさんできてきているが、学生たちに英語でそのようなものを作ら
せることを課題にすることもできる。他にもテクノロジーの使い方として Kindle の無料自己出版プロ
グラムを使って、授業で使う参考資料などを学生に配布している。また、Google Latitude を利用して
海外研修中の学生の体験を本国に残っている学生がインターネット上で追うこともできる。このよう
なメディアの有効活用の方法を教育関係者は考えていかなければならない。

3 ワークショップ

以下の二つのワークショップが行われ、最後にそれぞれのモデレーターから報告がなされた。

1) Recruiting, Motivating and Supporting Japanese Students to Study Abroad in the U.S.

Moderator : Prof. Paul Niwa, Emerson College

Mr. Jun Adachi, Consultant, Grew-Bancroft Foundation Board Member

Mr. Louis Meucci, Director of Student Services, Showa Boston Institute

Dr. Donald Ross, Director of the Center for International Education at Salem State University

Ms. Yukiko Shimmi, Graduate Research Assistant, Center for International Higher Education, Boston College

提案者それぞれが、多くの日本からの留学生や留学希望者への支援を行っている経験等に基づいて、報告が行われた。

早い時期から世界に視野を広げることでアメリカ留学へのより高い動機づけが期待されることから、日本の高校生を募る活動の紹介があり、若い世代の日本人が、アメリカへの留学をキャリアの一部として考えるための良いチャンスとなるもので、今後の方向性の一つとして有望であろう。国際教育という視点か

らは、留学生は自己の視野の拡大をその目的の一つと捉えており、アメリカに留学する者は、アメリカ人と接することのできる異文化体験を強く望んでいることが説明された。

また、議論は留学のための費用にも及んだ。例えば、マサチューセッツ州立セイラム大学のESLプログラムのように、本体の大学へ進学することを目的とする留学生プログラムの場合は、授業料を低く抑えても大学全体として経済的な問題は少ない。しかし、特に私立大学や大学院に留学しようとする場合、学費の高騰は大きな問題である。さらに学生ビザの取得にも厳しい条件があり、留学生を増やすことへの障害となっている。

経済的な問題も然ることながら、それ以上に留学への動機が低いこと、学生や両親が留学に高い価値を見出していないことが問題であるとの指摘もあった。アメリカの日本人留学生の歴史的な変遷についての説明もあり、留学生の減少は、いくつもの原因が複雑に絡んで現在に至っている結果と考えられよう。

会場からは、正規の留学生の増加のみを目指すのではなく、短期のプログラムを経験してもらうことで、正規留学へとつなげることも重要であろうという意見も出された。在学中の海外留学・研修の促進のためには、単位互換制度の整備、日本国内での国際教育交流プログラムの促進が効果的であろう。

短期的な目先の志向しか育まない現在の日本社会が生み出す、リスク回避志向による日本のガラパゴス化は、その改善が強く望まれるところである。グローバル人材育成に向けた両国大学関係者間の協働的な戦略に期待するところが大きい。



Closing Remarksを行う坂東学長

2) Elements of an Ideal Study-Abroad Program in Japan

Moderator: Ms. Junko Shiota Abuza, Showa Boston Institute

Ms. Eiko Torii-Williams, Wellesley College, Co-Director, Japanese Program

Ms. Kiyoko Morita, Tufts University

Prof. Zhigang Liu, Simmons College

Ms. Jenka Eusebio, Showa Boston Institute

それぞれの経歴と現在教えている日本語履修学生の状況について各発表者から報告がなされた。近年の日本語履修学生に見られる変化として、留学に対する費用対効果を意識しており、留学時に納得のいく学習成果が上がり、単位が認定されるようなプログラムであることを強く求めていることが挙げられる。また、他のアジア言語と異なり、日本語履修者には日系人は多くない。日本のアニメ、ポップカルチャーには幼少時より接している世代の学生達であり、従来は国際関係論を専攻する学生が日本語を学ぶことが多かったが最近では文化への関心が日本語学習の動機となっていることが多い。参加者の各大学とも日本への留学制度をもっているが、日本留学を希望する米国学生数よりも協定校から米国に留学する日本人学生の方が数が少ないのが現状である。この背景には英語力不足が考えられる。

米国人学生が好む日本留学プログラムを検討するにあたって、次のことが課題として指摘された。

- ①日本の学期と米国の大学の学期にずれがあること。
- ②国際寮に留学生だけが固められるような受け入れではなく日本人との交流が図れるような受け入れがあること、そのためにはホームステイが望ましいが大規模な実現は難しい。
- ③語学だけでなくコンテンツが学べるコースも必要、またこれに対して単位認定ができることよい。
- ④留学経験を就職に生かしたいという希望は多い、そのためにはインターンシップの経験が有効である。
- ⑤ボランティア活動に参加したり、日本人学生と交流するサークル活動への参加等、日本語を使ったオーセンティックな学びの場を求めている。
- ⑥英語で行う活動は、たとえば日米学生会議のように地球規模の問題について専門家と話したり日本人学生と意見交換をするような学びが望ましい。

U.S.-Japan Internationalizing Higher Education Symposium



▲オープニングで挨拶する平尾光司理事長
(学校法人昭和女子大学、昭和ボストン)



▲パネルディスカッションのモデレーターをする
Dr.Provost (President, Showa Boston)



▲パネルディスカッション



▲ワークショップ1の様子



▲シンポジウムを聴講するアメリカの大学関係者

▼ワークショップ2の様子



▼シンポジウム終了後の記念撮影
左から Prof. Philip Altbach (Boston College)、
平尾理事長、
竹内ハーバード大学大学院教授、
坂東学長、
Prof. Michael Lacktorin (千葉商科大学)、
Prof. Paul Niwa (Emerson College)、
Dr. Provost (President, Showa Boston)



第V部

今後の実施計画

第V部 今後の実施計画

■ 2013年度の補助事業実施計画

- ① 4月～3月 海外大学との交流拡大に向けた取組
- ② 4月～3月 ボストンでの学生交流に関する取組
- ③ 4月～3月 ボストンでの留学支援および語学力強化に関する取組
- ④ 4月～3月 東京キャンパスでの学生の留学支援に関する取組
- ⑤ 4月～3月 学生の外国語力スタンダード向上に関する取組
- ⑥ 4月～3月 外国人留学生の支援に関する取組
- ⑦ 4月～3月 教職員のグローバル教育力向上に関する取組
- ⑧ 4月～3月 大学の国際化に向けた取組
- ⑨ 4月～3月 本事業の内容と成果および大学に関する情報発信の実施
- ⑩ 7月 外国人留学生の短期受入プログラムの実施
- ⑪ 7月 グローバル人材に関するシンポジウムの実施
- ⑫ 3月 プロジェクト評価に関する3つの評価委員会開催

■ 補助事業の内容

2013年度の補助事業の内容は以下のとおりである。

- ①本事業の米国における拠点である昭和ボストンの近郊大学を中心に、短期集中プログラムおよび多文化協働プロジェクトなどの提携、インターンシップやサービスラーニングなどの活動拠点の整備など、本学教職員と昭和ボストン教職員が共同で候補大学と調整を行い、具体的な活動の準備を行う。また中国、韓国を中心とした東アジア、ベトナム・タイなどの東南アジア、ドイツなどの欧州での各種プログラムを実施するための協定校を整備し、学生の派遣・受入の両面で質の高い学生交流を開始する。
- ②昭和ボストンに開設したグローバルエデュケーションセンターに職員を配置し、近郊大学と連携しながら具体的な学生交流プログラムを実施する。
- ③昭和ボストンから他の海外大学への本格的な留学を進めるため、グローバルエデュケーションセンターに留学アドバイザー、プログラムコーディネーターなどのサポート体制を充実する。また海外という異文化環境で暮らす学生に対し、グローバルに活躍する女性の講演などを通じて、学生へのキャリアに関する動機づけを行う。
- ④東京キャンパスに新たに開設したグローバルラウンジおよび国際交流センターの2拠点を中心に、語学学習や留学支援のためのサポート体制を整え、学生の留学に向けた意識づけと学習支援を行うとともに、ポートフォリオを使った学修成果の管理を実施する。また、留学を見据えたカリキュラムデザイン、留学経験を生かした就職支援体制を構築する。
- ⑤学生の外国語力スタンダード向上のため、入学時に全学生を対象とした英語プレイスメントテストを行い、レベルに合ったカリキュラムを実施するほか、Eラーニングを使った学習支援、語学

学習アドバイザーによるカウンセリング、TOEIC® スコアアップのための講座等により、学生一人一人の英語スキルの向上を目指す。また、遠隔授業システムを利用してボストンおよび海外大学でのセミナーや講義を本学で受講できる機会を増やすとともに、次年度開設を目指す国際教養関連科目（英語による専門科目）の履習方法の調査等を行う。

- ⑥ 留学生の学習や生活を支援するために、外国人留学生向けの日本語チューター制度を充実させ、心理カウンセラーの配置、留学生マニュアルの発行、就職に向けた講座開設を実施する。同時に日本語能力の不足する外国人留学生のための日本語教育制度構築の準備を進める。
- ⑦ 大学の国際化に関する教職員の経験と知識を向上させるため、国内外の大学の視察およびボストンでの教職員研修を実施する。
- ⑧ 本学の諸規定について、外国人留学生や外国人教員が利用しやすく、また海外の大学からも理解できるように、各種規定や文書、シラバス、授業概要等の日英表記のための翻訳を進める。
- ⑨ 本事業に関する取り組みを紹介し、本学の教育活動や成果を広く国内外の関係者に知ってもらうために、WEB や印刷物を通じて積極的に広報を行う。また外国人留学生や海外関係者にも本学について関心をもってもらうために、日本語、英語、中国語、韓国語等の多言語での情報発信を行う。
- ⑩ 夏期休暇期間を利用して、外国人留学生の短期受入プログラムを試験的に実施し、日本人学生を同時に参加させることで多文化協働プロジェクトを実践する。
- ⑪ 本学のグローバル化に向けた取り組みを国内外の関係者に紹介するとともに、その成果を共有するためのシンポジウムを開催する。
- ⑫ 本事業の取組内容と成果について、本学のプロジェクト委員会による自己評価、学生による学生評価、企業を含む外部の委員による外部評価の3つの評価委員会を開催し、本年度の事業評価と次年度以降の活動内容の充実を図る。

これらを通じて、学生が「3C's for 1G」の資質を身につけるためのさまざまな取組の基礎固めを行い、本学の教育目的である「清き気品、篤き至誠、高き識見」を備え、「夢を実現する7つの力」を高いレベルで達成した学生の育成を図ることが、本補助事業の内容である。

■補助事業から得られる具体的な成果

上記の2013年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下のとおりである。

- ① 本年度中に、欧州やアジアを中心とした、3～5大学と交換留学を前提とした協定の締結、および単位修得が可能となるボストン近郊の複数の大学と共同プログラムの合意を目指す。これら提携する大学のネットワークを利用して、学生のさまざまな形態での海外での学習が可能となる。また、本学では長期・短期の外国人留学生受入の拡大が可能となる。
- ② 昭和ボストン在学中の本学学生と近郊大学に在籍する学生が交流することで、多文化のメンバーによる協働作業が実現し、学生の異文化理解の深化と自らのアイデンティティの自覚を促す契機となる。
- ③ 昭和ボストンにおける留学支援体制が強化され、積極的に海外大学に進む学生が増える。また、学生一人一人が留学経験を将来のキャリアと結びつけて考えることが期待される。
- ④ グローバルラウンジでのイベントや説明会を通じて、留学および異文化交流に関する学生のモチベーションの向上を期待できる。さらに、国際交流センターを中心とした留学および語学学習のための支援体制を整え、ポートフォリオを使った学修成果の管理に関するシステムを構築す

ることで、学生のモチベーションを具体的な行動につなげることができる。

- ⑤ 全学生を対象に、自分のレベルに合った英語学習を導入し、さらに学習支援体制を整えることで着実にスキルアップを図ることができる。これにより、グローバルな社会で活動するために必要な英語力の向上を目指す。
- ⑥ 外国人留学生の日本語能力の向上と、生活面を含めた支援体制が充実することで、多くの留学生に充実した学びの場を提供することができる。また留学生が安心して学習できる環境を整えることにより、留学生本人の学修成果の向上と、日本人学生に対するよい意味での競争意識の芽生えが期待できる。
- ⑦ 国際化に向けた国内外の高等教育機関の取組を知ることで、多くの教職員が今、必要とされる取組を理解し、さまざまな立場で大学の国際化に貢献することができる。
- ⑧ 英語版の各種規定、文書、案内等を教職員や留学生に分かりやすいように学内に配置する。シラバスの翻訳については、既存の学籍管理システムを改修することで、英語版の授業概要を公開するための準備を整える。
- ⑨ ホームページや各種印刷物を通じて、本学の取組内容等を国内外に発信することで、本学に関心のある海外大学との提携や外国人留学生数の拡大につながる。
- ⑩ 留学生用の短期プログラムを実施することにより、本格的な日本留学のきっかけとなる。またこのプログラムを利用して、本学学生との多文化協働プロジェクトを行い、国内での異文化交流を活性化させる。
- ⑪ 国際シンポジウムを開催することにより、本取組を国内外の関係者に発信し、本事業の公表・普及につなげると同時に、そこで得られた知見をもとにさらなる改善を図ることができる。
- ⑫ それぞれ異なる立場からの3つの評価委員の評価を通じて、本事業の成果をより客観的に理解することができる。



昭和女子大学

swu.ac.jp